
諸尾博士の島

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

諸尾博士の島

【Nコード】

N4146I

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

漂流した「おれ」は、孤島に漂着する。そこには何と、美少女が何人も住んでいた！なぜ、どうしてこんな島に無数の美少女が？島を支配する諸尾博士とは何者か？そしてこの島の秘密とは？結構過激な描写がありますので、注意してください。追記・ユニク・アクセスが1万を突破！愛読、有難う御座います！

漂流

空は晴れ、雲ひとつない。太陽はまうえに輝き、みわたすかぎりの水平線。南太平洋のどまんなかで、おれは死にかけていた。

飢えと渴きがおれの生命をじりじりと削っている。もう一週間、ひとくちの水も食料もとってはいない。こんなに水があるのに、飲むことすらできない。渴きに負け海水をのんだらひどいことになる。

おれは救命ボートにゆられ漂流していた。高校の三年間に内緒でつづけたアルバイトでためた貯金をおろし、客船で世界一周旅行としゃれこんだのがいけなかった。日本をたって一週間後、おれの乗り組んだ客船は暴風雨に遭遇し転覆したのである。船が沈む直前、いのちからがら救命ボートにたどりつき逃げ出すことができたが、幸運はそれまでだった。救命ボートに備え付けていなければならぬはずの食料や水が、嵐によってながされてしまっていたのだ。

あれほど吹き荒れた嵐はあれつきりどこかへ行ってしまった、毎日が上天気である。太陽は毎日勤勉にのぼり、あたりにまぶしいほどの陽光をなげかけている。この太陽に一日中あぶられ、おれはじつくりと干からびていた。唇はがさがさになり、頭はぼうつとなつてまともなものも考えられない。

雨雲はまったく通りすぎてくれず、毎日空は雲ひとつない青空である。

おれは死ぬのかなあ。考えればつまらない一生だった。

かもめが飛んでいる。

一羽がばさばさと羽音をたて、ボートの舳先にとまった。

どうやら羽根をやすめるつもりらしい。
きょろりと黒い目でおれを見つめている。

おれの口の中が唾液であふれた。

食い物だ！

おれはそろりとかもめに近づいた。

たのむ、そのままいてくれ……！

さっ、と手を伸ばす寸前、かもめはひよいと飛び上がるときーつと空へ浮かび上がった。ぎゃあぎゃあとうるさく鳴いて遠ざかる。

おれはボートの底をたたいた。

畜生、かもめさえおれを馬鹿にしゃがる！

なみだがあふれる。

からだはからからに乾いているのに、なみだは勝手に出やがる。

が、顔を上げたおれは信じられないものを目にした。

水平線のかなたを見るとかすかに島影が見える。

島だ！

陸地だ！

おれはボートのうえで伸び上がった。

いきなり立ち上がったのでバランスを崩し、ボートがぐらりとゆれた。おれはあわててボートの縁にしがみついた。

何度も見直すがたしかに水平線のかなたに島影が見えた。どうやら緑が植わっているらしい。ということは水があるということだ。もしかしたら人家があるかもしれない。

島のかたちは中央部がもりあがり、三角形の山になっていた。山の頂上ちかくまでべったりと緑がおおい、ゆたかな樹藪を見せている。

おれはボートのオールを手にとった。必死になって水面を掻く。ぱしゃり、ぱしゃりとオールを動かしボートを近づける。

運がいいことに海流は島へ流れているようである。

じよじよにであるが、近づいていた。しかし、じれったいほどボートの動きはのろい。

オールを漕ぐおれの腕はなまりのように重くなってしだいに動かなくなった。疲労でおれはがくりと頭をたれ、ボートのうえで横になってしまった。そのまま意識が遠ざかった。

気がつくと夕日が空をそめている。

ボートになにかごつごつとあたる。

顔をあげるとボートの舳先に岩があたっていた。

おれはあたりを見回した。

砂浜が見える。

夕日にてらされ、オレンジ色に輝いていた。

波がざばあ……とうちよせ、しろい波頭がくだけた。

海流にながされ、島にたどりついていたのだ。

おれはボートからころげおちるように降りると、砂浜めがけ走り出した。

波打ち際ぎりぎりに森がせまっている。海面に根をおろしているところを見ると、熱帯に生えるマングローブの森だろう。

ひゃあ、というような喚声をあげ、おれはたおれこんだ。

砂浜は一日陽に照らされ、やけそうに熱い。おれの濡れた服の水分が砂に吸い込まれるのを感じた。

おれはすっかりとした大地に横たわっていた。もう波にゆられずにすむ。ああむけに倒れたまま、手のひらを砂の中につっこんだ。

さらさらとした砂がおれの指の間からこぼれおちる。たしかに陸地だ！

おれは森を見上げた。

あそこに行かなければ……

水。

水……

おれの頭にはただそれだけしかなかった。

必死になって手足をうごかし、這っていこうとするがちからがない。おそろしいほど全身が疲労していた。

おれはがくりと頭をたれた。そのまま気が遠くなっていく。

メイド？

おれの耳にさくさくという足音が聞こえてきた。

足音はおれのそばに近づくととまった。

うすく目をあける。

こちらの顔をのぞきこむ人影が見えた。

女だ。

いや少女といったほうがいい。まだ二十歳^{はたち}にはなっていない。大きな黒目がちの瞳に白い肌の女の子である。顔はやや面長で、憂いをふくんだ表情をしていた。

もうひとりの足音が近づく。彼女ははつと顔をあげ、視線をかなたにうつした。

「メイ、どうしたの？」

「ひとが倒れているんです。男のひとです！」

えっ、というような声がしてさくさくと足音が近づいてきた。おれの視界にもうひとりの女の子があらわれた。ややつり目がちの瞳にほそい顎をした少女だった。

「まあ、ほんとう！ 大変だね。博士に知らせなきゃ！」

うん、とうなずき彼女は身をひるがえすとどこかへ走っていった。残ったメイとよばれた女の子は心配そうにおれにかがみこんだ。

「大丈夫ですか？」

おれはかすかに唇を動かした。

水……、と声をだしたかったが喉がからまってごろごろというような音をだすのが精一杯だった。彼女はそれだけでわかったようだった。

「お水がほしいのね！ ちょっと待ってて……」

そう言うとき彼女もおれの視界から消えた。やがてふたたびあらわ

れたとき、彼女はコップを持っていた。

水だ！

ちやぶちやぶという水音がおれには天国の音楽に聞こえる。

彼女は腰をおろし、その膝におれの頭をのせた。ああむけになったおれの口にコップを近づけてくれる。唇に水がふれ、おれはごくごくと夢中でコップの水を飲み干した。

助かった！

コップの水はきんきんに冷えていた。

たった一杯の水だが、水分がみるみる体中にしみこんでいくようだった。

さくさくさく……

ふたたび足音が近づく。

こんどは複数の足音だ。

首をねじむけると、少女たちが砂浜をふんで近づいてくる。彼女たちのひとりは担架をかついでいた。

そのとき、おれはようやく奇妙なことに気づいていた。

彼女たちの話していたのは日本語である。たしかにそうだ。

ではここは日本なのか？

日本のどこかの島に漂着したのだろうか？

それにもうひとつ奇妙なことがあった。

それはおれを救った少女たちが着ている服である。彼女たちが身につけていたのはメイドの服だった。

ほら、秋葉原のメイド喫茶なんかで見るあれである。違いはスカートが膝丈よりながく、足首まで達しているくらいである。
南の島にメイド喫茶？

馬鹿な……

おれはふたたび目を閉じていた。

尻尾

ばかりと意識がつかびあがり、おれはしろい漆喰の天井を見上げていた。

くるり、くるりと天井に設置されている扇風機の羽根がまわっている。喉の渇きはとまっていた。かつてないほどおれは快適な気分だった。しかし頭のなかはふわふわとしていて、手足はぐったりとなっている。おれは目だけ動かし、あたりをさぐった。

おれはベッドに寝かされていた。

鉄製の、病院などで使われているベッドのようだ。

ではおれは病院に入院しているのか。

「目が覚めたようだな」

しわがれた老人の声がして、そっちを見ると白衣を身につけた老人がおれの顔をのぞきこんでいた。首から聴診器をぶらさげ、手首をにぎって腕時計をのぞきこんでいる。脈をはかっているらしい。反対側の腕にはチューブがささり、点滴の容器に繋がっていた。老人は小柄で、ひどくやせこけている。口にはしろい口ひげをはやし、黒縁のおおきな度の強い眼鏡をかけていた。その眼鏡のおくからぎよろりとしたふたつの目がおれを見つめていた。すべてを見透かすようなその目に見つめられ、おれは落ち着かない気分になった。

「あなたは？」

「わしは諸尾といって、この島の持ち主だよ。娘たちがきみを見つけたのでここへ運んだ。脱水症状であぶなかったがもう安心だ。明日には歩けるようになるだろう」

老人の声はうつろで、どこか息がぬけるような響きがあった。ひ

と声、ひと声話すのもしほりだすようで、おれの身体よりこの老人のほう具合が悪いのではないかと思われた。

「ここは日本ですか？」

「いいや、違う。ここは……」

諸尾と名乗った老人は南半球にあるちいさな国の名をあげた。老人の説明によると、おれが漂着した島はいくつかの国の領海線が重なっていて、行政的に複雑な事情があるため、いまのところこの国にも所属していない。そのため、ここに暮らしているのはこの諸尾という老人と、そのメイドたちだけなのだそうだ。

メイドだって？

「まあ明日にはおきあがれるから、話はそれから聞こう。いまはゆっくり休むんだな」

かれはひとりうなずくと立ち上がり、部屋を出て行った。

おれは部屋を見回した。

天井が高く、壁は白い漆喰で塗られている。窓からは夕日がさしこみ、庭が見えた。庭には数本の棕櫚が植えられ、風に葉がゆっくりとゆれていた。

かちやり、とドアが開く音がしてそつちを見るとあのメイという娘がはいってきた。彼女はおれの顔を見るとにっこりと笑いかけた。「あの……あたしが博士にあなたのお世話をすると言われました。メイっていいいます。どうかよろしく！」

そう言うつとぺこりと頭を下げた。おれはうなずいた。

そのときメイという娘が、ものすごい巨乳であることに気づいた。メイド服の胸をふくらませているおっぱいは、彼女の顔よりおおきそうだった。おれの視線は彼女の胸にくぎづけになっていた。

いけない、いけない！ おれをたすけてくれた彼女にこんなよこしまな思いをもってはいかん！

おれはむりやり視線をひきはがした。

メイはそばに身を寄せると顔を近づけ、おれの額に手をやった。

「熱はさがったみたい…… なにかしてほしいことはないですか」

彼女を見ているとおれはつい、軽口をきいてみたくなった。

「キスしてほしいな」

おれはにやりと笑い、冗談でそう言った。

ところが彼女は真剣な顔になった。

「あの…… 本当に？」

えっ、とおれは彼女を見つめた。まさかおれの冗談をまにうけたのか？

メイはじつとおれの目を見つめ、やがてうなずいた。

「あの…… 失礼します！」

息をすいこむと顔を近づけてきた。彼女の唇がせまる。肉厚の、いろっぽい唇だった。

彼女はいいにおいがした。

かすかにあまく、ミルクのようなにおい。

上体をかたむけ、彼女はおれの唇にじぶんの唇をかさねた。ずっとしりとした胸のふくらみがおれの胸におしつけられる。

舌がおれの口のなかへすべりこんだ。おれはその舌を吸ってやった。じゅるじゅると唾液があふれる。

ふたりの舌がからまりあい、彼女の身体が熱くなるのを感じた。

ほう——、とメイは息をはき身を起こした。顔は上気し、目はしっとりとうるんでいる。

「いかがでした？」

「よかったよ」

彼女は手をまっかになつたほほにあてた。目がうるんでいた。そしてじっとおれの目を見つめる。

「あの……ほかにしてほしいことは？」

期待にみちた目で見つめてくる。

ようし……言ってみるか。

おれは彼女に耳を寄せるよう手招きした。メイが身をよせるとその耳にそつとあることをふきこむ。

はつと彼女の顔は真っ赤に染まった。

やがて決意したように口許をひきしめると上着の胸元のボタンをひとつひとつはずしはじめる。指先がかすかにふるえていた。

ぼろり、と彼女の乳房があらわになる。

しろいふたつのふくらみがおれの目の前にあつた。

おおきい……

ほとんど彼女の顔くらいあるふたつのふくらみは半球形で、乳首はピンクだった。

肌がしろいせいか、血管が透いて見えていた。

するりとメイはおれのベッドに這い上がった。四つん這いになってその胸をおれの顔におしつけた。おれはその乳首を口にふくみちゅうちゅうと吸った。

あ！

メイは眉をよせ身をそらせた。

はあはあと息をあらげ、ゆっくりと胸のふくらみをおれの顔におしつける。やがて上体をゆらせ、おれの顔におしつけられた乳房は

右に左に揺れ動く。やわらかなふくらみはまるでおれの顔をおしつぶすようにやわやわと動く。

彼女の肌がかつと熱くなった。

じつとりと表面が汗で湿ってくる。

がくりとメイは腕のちからをぬいた。俺と彼女はベッドのうえでしばらく抱き合っていた。

「もっと……してほしい……ことは……」
とぎれとぎれ彼女は囁いた。

おれはさらに要求した。

彼女はうなずき、おれの身体にかけられた毛布をはぎとった。

おれの服は脱がされ、かわりにパジャマが着せられている。メイはうずくまるとズボンをゆつくりと脱がしはじめた。パンツをひきおろすとペニスがによつきりと勃起し、天井をむいた。

メイはそれを口にふくんだ。

ゆつくりと彼女の頭が上下する。

彼女の舌はやわらかくおれのものをつつみ、丁寧に舐めあげた。

おれのペニスは彼女の唾液にぬれ、てらてらとひかった。たつぷりと唾液でぬれると、彼女は胸のふくらみを両手ではさみ、つつみこんだ。すっぽりと完全にうまる。そのままこきざみにこすりつけた。

おおおおっ！

気持ちいい！

快感が背筋から腰へと電流のようにはしり、爆発した。

「あ………」

彼女の顎からしろいどろりとした精液がしたたった。メイは手で受け、それを飲み干した。ふうふうと息がはずみ、肩で息をしていた。

それでも彼女はおれの飛び散った液をひとしずく残らず舐めとってくれていた。

おれは全身に汗をかいていた。メイはおれのパジャマをぬがし、タオルでぬぐってくれた。おれの全身をぬぐう彼女の顔は慈愛にみちている。

ふたたびパジャマを着せて彼女は上着をもとにもどした。

「おなかがすいたでしょう？　なにか持ってきますね」
につこりとほほ笑むと、彼女は背をむけ部屋から出て行った。

そのとき、おれは信じられないものを目にした。

彼女のスカートの裾からのびる尻尾を。

そのさきには黒い毛が生えて、彼女があるくたび左右にぶらぶらとゆれていた。

朝食

翌朝、おれは諸尾博士と朝食をとった。食堂はおれが運ばれた部屋からながながとのびた廊下のさきにあった。メイがむかえにきて、おれを案内した。彼女はおれと目が合うとほほをあかくしてうつむいた。

おれと彼女は廊下をあるいた。窓から朝のしろいひかりがななめにさしこんでいる。窓から見るこの建物の屋根にはスペイン風の瓦がふいている。かなりおおきな建物らしい。

ぎいぎいぎい……

単調ななにかの機械が回転するような音が聞こえてくる。なんだろうと窓の外を見ると、鉄塔の先端についた巨大なプロペラが回っているところだった。プロペラは砂浜ちかくに何基もたてられ、いっせいに潮風にふかれてまわっている。

「ありや、なんだい？」

「風力発電です。あのおかげで電気がつかえるんです」

へえ……

おれは感心した。

しかし風力発電にしては規模がおおきすぎる。あれだけの発電機があれば、町ひとつくらいまかなえるほどの発電量になるだろう。

あとからおれは、この島のさまざまな箇所に施設が点在していることを知った。その施設を動かすため、あれほどの大規模な風力発電機が必要なのだと知る。

が、いまはそのことはおく。

食堂にはいると十人くらい一度に食事がとれるおおきさの食卓があり、そのはしに諸尾博士がすわっていた。かれはおれを見ると顔をほころばせた。博士のうしろには、メイとおなじようなメイド服を着た娘が数人ひかえている。彼女たちはおれを見るとくすくす笑いさめいておたがいつつきあった。

「元気になったみたいだな。よかった、よかった」

「ありがとうございます。たすかりました」

おれは礼をいった。博士は手をふり、うなずいた。昨日の印象がさらに強まった。博士の顔色はとても健康とはいえない。どす黒く、日焼けとはちがう肌の黒さである。

博士はテーブルに肘をつき、両手の指を顔の前でつきあわせ三角形のかたちをつくった。手の甲には蛇のように血管がうきでている。

「さてと、これからのきみのあつかいについて考えなくてはならないな。なんでも船が沈んだそうだね。一週間前の嵐のせいらしいなきみは日本へかえりたいかね？」

おれはもちろんだとうなずいた。博士は困ったような顔になった。「それなんだがね、ここはほとんど船は通らない。航路から外れているからな。ひと月にいちど、補給のため連絡船がくるほかはだれもこないんだ。その連絡船は、嵐の前にきたばかりだから、つぎにくるのはひと月後ということになる。きみさえよければ、それまでゆつくりしてもらいたいんだが」

おれはそれに同意した。船がこないならしかたがなかった。

「まあ食べたまえ」

博士の合図でメイドたちがキッチンからぞろぞろとあらわれ、おれの目の前に朝食をならべてくれる。

朝食は和食で、ご飯に納豆、卵と魚の塩焼き、つけものという組み合わせだった。おれは夢中で平らげた。そんなおれを、博士はじつと見つめていた。博士はあまり箸を動かさず、ほんのすこし口にただけだった。

「きみは若いな。年はいくつかな？」

「十八になります」

「それで世界一周を？ ふむ、おもしろい若者だ」

そのとき博士の目が異様にきらめいた。熱意ともいつていいような目つきでじろじろと見つめてくる。おれはその目つきになんだか落ち着かなくなった。

食事が終わり、博士は立ち上がった。

「さてと、わしはこれから研究のつづきをやらなければならん。きみはこの島ですきにしていればいい」

よろりと立ち上がった博士を、まわりにいた娘たちがささえた。

どうやらあしもとがおぼつかないらしく、よちよちと歩くだけで精一杯らしい。疲労がかれの全身を蝕んでいるという感じがした。

博士のくちにした研究というのが気になった。いったいこの老人は日本から遠く離れたこんな島でなんの研究をしているのだろうか。

博士をささえる娘たちのスカートから見えるものにおれは興味を持った。みなさまざまな尻尾のようなものをぶらさげている。

人間に尻尾があるわけないから、なにかの飾りだろうがなぜそんなものをぶらさげているんだろう。

すきにしていいいいわれても、おれはとまどった。さてなにをすりゃいいんだ？

おれが歩き出すとメイがついてきた。

「ねえ、きみ」

呼びかけるとはいっ、と返事をかえす。
目をきらきらさせ、じっとおれの顔を見つめてくる。

うへえ、なんだかうつとおしいな……

なんだかそんなことを思った。

「なんでしよう？」

小首をかしげた。

「その……、きみの……」

おれは彼女の尻尾をゆびさした。

メイは片手で尻尾を持ち上げた。

「これですか？ 尻尾ですわ」

「うん、なんでこの島の女の子はそんなものをつけているんだい」

「だって、女は尻尾をもっているものですわ！」

「えっ？」

「男の方には尻尾はありません。女は尻尾があります。どこかおかしいですか？」

「どこかって……じゃ、きみの体の一部ってことかい？」

「はい」

彼女はうなずいた。

「まさか……じゃ、ほんとうに生えているのか？ 飾りじゃなく？
またうなずく。

「見せてくれないか。きみの身体から尻尾がはえているところ」
いいですよとこたえてメイはくるりと後ろを向き、スカートをたくしあげた。彼女はスカートのしたになにも穿いてなく、ノーパンの尻がむきだしになった。腰のわれめからぶらんと尻尾がたれさがっている。

おれは彼女の尻尾をにぎってみた。

かすかに暖かく、はえている毛はほんものみたいな手触りだった。

ほんとうだ……たしかに生えている。
いったいどういうことだ？

ジェラシー

砂浜をおれはメイと一緒に歩いてきた。おれが最初に見つけられた場所である。今日の砂浜は潮風が心地よい。メイの言うところでは、島の周囲はわずか三キロほどで、それなら一時間もあれば一周できそうだと。それにしてもこの島は中央に山もあり、森もふかく、起伏にとんでいる。いい観光資源になりそうだが、肝心の航路が近くを通っていないため忘れ去られているのだろう。

砂浜のむこうに桟橋があった。あそこに補給船がつくのだろう。波打ち際におれが乗ってきたボートがゆらゆらとゆれていた。だけれど、それが舳つたのか、ロープがつきだした岩にまきついていていた。

「ここには海草をとりにくるんです。博士が好きなもので。それであなたを見つけたんです」

ふうん、とおれはあたりを見回した。日本はどっちの方角だろうと、ふいにボートがぐらりとゆれた。はっ、とメイが身体をかたくさせた。

ボートからひとりの娘が顔をのぞかせた。こっちを見るとやりと笑う。

立ち上がり、ボートから飛び降りると砂浜を歩いてきた。

日焼けした肌に長い髪は腰まで届いている。身につけているのはメイのようなメイド服ではなく、腰と胸をわずかにおお布切れだけだった。精悍な表情の彼女はじろじろとおれを見つめてきた。

彼女もまた尻尾を持っていた。歩くたびふらりふらりと左右にふれる。尻尾はどことなく猫の尻尾のようだった。

「へえ……」

にやにや笑いながらおれのまわりをゆっくりと歩く。じろじろと見つめ、ひとりうなずいた。

「男のひとが倒れていたって聞いたけど、本当なんだ」
くすり、と笑うとひよい——とひととびでおれの目の前へ近づいた。

そしてすばやくおれの唇にじぶんの唇をおしつける。彼女の舌がおれの口のなかへはいってきた。

ざらざらした舌触り。

ふっ、と息をはき彼女は身をはなした。
目をほそめくくつとちいさく笑う。

「ナナっ！」

メイがさげんだ。とすると、この娘の名前はナナというのか。メイは顔を真っ赤にさせ怒りにこぶしをふるわせている。

けらけらとナナは腹をかかえて笑った。

「なによっ、メイ。あんたが怒ることないだろう？」

「だって……だって……」

メイの目にはなみだがたまっていた。それを見てナナはおどろいたように肩をすくめた。

「いいじゃない。男のひとが見つかったって聞いたからちょっと会いにきただけだもん。あんたが泣くことないわ」

さっさとナナは背を向け、森の方向へ歩き去った。森にはいる直前、彼女はおれにふりかえった。

「あんた、もし博士のところの娘にあきたらあたしたちのところへいらっしやい。うんとサービスしてあげるから！」

じゃね、と彼女は手をふって森のなかへ消えた。

「なんだいありや？」

おれはメイに尋ねた。彼女はまだ怒りに身をふるわせている。

「あの娘たち、博士のお世話をするのがいやだって、森のなかで勝

手に暮らしているんです。この服も暑苦しいからいやだつて、もう大嫌い！」

ふうん、とおれは顎をなげた。

正直、あの娘には興味津々だった。

メイもそうだが、博士の身の回りにいるメイド服の女の子たちはまるでよくしつけられた召し使いのようだ。いや、事実嬉々として召し使いの仕事をしているように見える。メイにおれはあんなことを命令したのにかかわらず、彼女はまったく拒否することも知らない。しかもおれに恋するしまつた。まるでよくしつけられたペットみたいである。それなのにあのナナという娘はまったくちがった。独立独歩というか、まったくひとの命令をうけつけない気風がありそうである。つまりこの島には二種類の女の子がいるということだ。ひとつは召し使いタイプ、もうひとつは独立タイプ。どちらが好ましいかというと、おれには後者のほうだ。

よし、いつかあの娘に会いに行こうとおれは決意した。

「あのう……」

メイが話しかけてきた。

なんだとふりかえると恨みがましい目で見上げてくる。

「ナナのキス、よかったですか？」

「へ？」

「あの娘のキスのほうがあたしのキスよりよかったですか！」

おいおいジェラシーか。

メイはのびあがるとおれの首に腕をまきつけてきた。そのまま唇をおしつけてくる。おれは反射的に彼女の腰をだきよせた。

メイはぐいぐいと身体をおしつけた。彼女のふたつのふくらみは服を通してもしっかりわかる。まあいいか……彼女のこのやわらかなふくらみはじつに気持ちいい。

おれは彼女の腰から尻へと手を動かした。

そして指先がスカートの上から彼女の尻尾へとふれる。おれの指先で、彼女の尻尾はひくひくと動いていた。いったいこの尻尾はなんだ？

キス

「あー、メイったらずるーい！」

喚声があがり、おれはぎよっとなつて横を見た。

見ると数人のメイド服の女の子たちがおれたちを見てはやしたてている。

メイははずかしそうにうつむいた。

彼女たちは早足になつておれたちのほうへ近づいてきた。

「ねえ、あたしたちもキスしてえ！」

一番年下らしい娘がおれの裾をひっぱつてせがんだ。背丈から見るとまだ小学生くらいに見える。顔の輪郭はまるく、ふつくらしたほほに驚くほどおおきな目をしていた。しかし服の胸はふくらみ、腰もしっかりとはっている。背丈は小学生くらいしかないが、身体は大人になっているのかもしれない。メイを見ると彼女はにっこりとうなずいた。

「お願いします。あたしがさきにいいことしたつて、みんなから責められているの」

「あたしキイ！」

キイ、と名乗った彼女は両手をあげしがみついてきた。おれの胸にもとどかないくらいの小柄な娘だ。おれは彼女の脇に手をいれ、ひよいと持ち上げた。軽い。

うふ、とキイは笑うとその腕をおれの首にまきつけてきた。そのままおれの顔に唇を近づけてくる。落ちないよう両足をおれの身体にまきつけた。

彼女のキスははげしかった。唇を吸うだけでなく、舌をつかつておれの顔をべろべろと舐めてくる。たちまちおれの顔は彼女の唾液

でべたべたになってしまった。

「もう……キイちゃんったら、いつもそれなんだから」

ひとりの娘がキイをしかった。ふわふわしたカールした髪の毛をしたおとなしい感じの女の子だった。

たしかメイといっしょにおれを見つけた女の子だ。

「あの……あたしはレイっていいいます。よろしいですか？」

キイがおれの身体にしがみついたままでレイと名乗った女の子は顔を近づけてくる。おれはふたりを一度にだきしめた。レイはおれの唇を吸って、キイはおれの耳から顎へねいりに舐めていた。

あたしも、あたしもと残りの女の子がせまってくる。たちまちおれは彼女たちの輪のなかにはいつて四方から身体を押し付けられていた。

「うわあ！」

おれはさげんだ。

「もういいだろう？ ああ、暑い……」

なんだろう、この娘たちは。まるで色気違いだ。まわりにみつしりかこまれたせいで、まるでサウナにはいったみたいに汗だくなってしまった。

くすくすと娘たちは笑っておれの手をひくと屋敷へとひっぱっていく。

「汗かいたからお風呂いきましよう！」

レイがさげぶ。

「そつよ、お風呂よ！」

キイが同調した。

たちまち彼女たちの目つきが変わった。

きやあきやあと彼女たちは甲高い声で笑いさざめいた。

風呂

娘たちはおれを引っ張って風呂に案内した。そこは屋敷からわたり廊下につながっている別棟の建物だった。

風呂は周囲をガラス張りにした温室のようなつくりになっていた。ひろびろとして、ちょっとした銭湯くらいはある。床にはたくさんの鉢植えがならべられ、観葉植物が植えられていた。娘たちは脱衣所でそれぞれの服を脱ぎすて、おれにまわりついて服を脱がしはじめた。彼女たちの息はずみ、無数の手がおれの服にかかった。すっかり裸にされ、おれは彼女たちにとりかこまれたまま風呂場へと移動した。女たちはぎゅぎゅうとおれの肌に身体をおしつけてくる。

ざぶん、とおれたちは湯船にはいった。湯の温度はぬるめで、いっぺんに飛び込んだのでざああと水があふれている。

あははは、と娘たちはおれのまわりに集まった。はあはあとはずむ息がおれの顔にかかった。おれはたまらず叫んだ。

「ちょっと待った！ こ、こんなことして博士はなにと言わないのか」

彼女たちはきょとんと顔を見合わせた。おれの言葉が理解できないらしい。

「いったいきみらは博士のなんなんだ？」

「あら、召し使いですわ。もちろん」

レイがとうぜんのようにこたえた。

「召し使いつて……、いつもこんなことしているのか？」

メイがうつん、と首をふった。

「だって博士、あっちのほうはぜんぜんだめなんだもの」

「だめ？ だめってつまり……インポってわけか」

「インポってなあに？」

「あれが勃たないってことさ」

まあ、とメイは口をあけた。そしてかなしそうにうなずいた。

「そうなんです。博士は身体がお弱いのでせっかくあたしたちがい
てもなにもしてくれないの……おかawaiiそう」

くすん、と鼻をすすった。

「だからあたしたち、いつもおたがい慰めあってるのよねえ！」

キイが話しくわわった。そしていきなりメイの乳房をつかむと、
その乳首に吸い付いた。メイは「あ！」と眉をよせ、のけぞった。
レイがにやにやして身をよせてきて、もうひとつの乳房に顔を近づ
けた。ふたりに乳首を吸われ、メイは顔を真っ赤にさせている。

するり、とおれの背中にひとりの女の子がもたれかかってきた。

ふたつのまるいふくらみが押し付けられた。お湯のなかでふくらみ
はつるつると滑って気持ちいい。

「あたしヨウ。よろしく」

ヨウは赤毛にちかい髪をした女の子だった。口がおおきく、につ
とわらうとえくぼができた。彼女はぐいぐいと身体を押し付けてく
る。肌が熱くもえていた。色白で、肌は興奮でピンクにそまってい
る。彼女はほかの女の子と違い、かなりふとっていた。いや、はっ
きり言ってデブだ。彼女が身動きをすると、それだけで水面がおお
きく波立つ。彼女のふたつのふくらみはおれの顔よりおおきそうだ。
ヨウはおれの肩にそのふくらみをでれん、とのせてきた。おれはそ
れに頭をもたれさせた。まるで枕だ。ふわふわした肉がおれのほほ
をうめていた。

「ねえ、いいことしましょ」

「いいこと？」

「そう……」

はあはあと熱い息がかかる。背後から彼女の両手が前にまわり、おれのペニスをつかんできた。ぎゅつと亀頭をつかみ、湯のなかでやわやわともみあげた。たちまちおれのものは固くなった。おれは彼女の肉にうもれていた。

「すごい……！」

ヨウの息がおれの肩にかかった。

ふうふうと、ふいごのような鼻息だ。

「あ、いいことしてる！」

キイがざばざばと湯をかきわけ近づいた。背が低いから、やつと肩が出るくらいだ。ひょいとおれの膝に乗ると顔を近づけた。

「ねえ、して！」

ぎゅつとおれに抱きついてきた。こんなにちいさいのに胸や腰は一人前に発達している。究極のトランジスタ・グラマーだ。キイはそのまま腰をおろしてきた。

ぐつ、とおれのものが彼女の股間に差し入れられた。キイはいっぱいに足を開き、ひっしになって受け入れようと頑張っている。口許がぎゅつと引き締まり、眉をよせ目を閉じた。

プレイ

ああっ、とキイは背をそらせた。

「はいってる！ はいってるよう……」

がくがくと腰を動かしている。

目がとろんとなり顔は真っ赤に染まった。

彼女の甘い声でまわりの女の子はうらやましそうにしていた。おたがいの顔を見合い、うん、とうなずきあった。がばっ、と抱き合いおたがいのおっぱいを押し付けあった。ぎゅうぎゅうとおたがいのふくらみがゆがんで、おかしい形につぶれている。

ああ、ああ、ああ……

風呂場に彼女たちのあえぎ声が反響し、ざばりざばりと湯が波立った。

「ひいいいっ！」

キイが甲高い悲鳴をあげた。

うん、と身体がつっぱり彼女の尻尾がぴんとおっ立った！

尻尾はびくびくと天井をさし、やがてだらりとたれた。キイはがくりと身体のちからをぬき、おれにもたれかかった。

ふうふうふうと息をはく。

もたれかかった彼女の肌は燃えるように熱い。

おれのまわりで抱き合っていた女の子たちも達しているようだ。湯のなかから彼女たちの尻尾がぴん、と硬直していた。

おれもまたキイの身体の中に放出していた。彼女の身体を持ち上げると、ずばりと股間からおれのモノが引きぬかれる。たらたらと彼女の股間から白い液がドロリとあふれている。キイはほとんど

失神していた。このままほっとくとおぼれそうなので、おれは彼女をかかえたまま湯から立ち上がった。

ボディ・ソープ

「ねえ洗いつこしよう！」

デブのヨウがそう言っただけで波をかきわけ湯船から出てきた。そのまま風呂場の床にあおむけにねそべった。彼女の巨体のうえに、ほかの女の子が身をよこたえた。レイがボディ・ソープの瓶をつかみ、なかの液体をとるとたらした。あははは、と彼女たちは笑いあい、ぬるぬると身体を押し付けあった。たちまち彼女たちは石鹸の泡だらけになる。

「ね、洗ってあげる」

メイがそう言っただけで寝そべっているヨウのうえへさそった。さそわれるまま、おれは彼女の腹のうえにあおむけに寝そべる。うふふと笑いながらほかの女の子たちが全身に泡をつけたまま肌を押し付けてきた。メイはそのふたつのふくらみに石鹸をたっぷりつけ、のしかかっていた。

背中がヨウの巨体、そして前はメイの巨乳にはさまれ、おれは気持ちよさにつつまれていた。おれの両腕をふたりが股間にはさみ洗ってくれていた。

メイはおれのナニをその巨乳ではさみこんだ。

ぴよこり、ぴよこりとおれのナニの頭が彼女の胸の谷間から「こんにちわ！」をしている。泡がにゅるにゅると滑っていた。

彼女は唇のはしに笑みをうかべ、おれをじっと見つめていた。胸のすきまにうまっているおれのものを愛しげに見ている。

レイがシャワーの栓をひねった。

彼女はシャワーの噴き出し口をじぶんの股間にあてがい、しばらくその感触を楽しんでいたが、やがて満足するとねそべっているおれにむけた。

ざああ……と、おれの身体に湯がかけられ、泡が洗い流される。すっかりおれは洗い上げられ、すっきりとなっていた。

「舐めさせて……」

キイが顔を真っ赤にさせ口を近づけた。すっぱり口の中におれのナニの先端がうもれた。ずるずると音を立て、キイはおれのものを吸っている。そのまま先端から根元まで何度も舌をはわせ、コロコロした物へと移動していく。おれのふたつの玉が彼女の舌で転がらせている。そのキイの股間をメイがあおむけになって顔をはさんでいた。舌がキイの股間を舐め上げ、吸い込んでいた。

「はう！」

キイは目を閉じ、顎をあげた。

くくく……と必死にたえていたが、尻尾はぴんと硬直していた。がくりとちからがぬけ、そのまま横倒しになって離れていく。メイは笑みをうかべおれに跨った。

「こんどはあたし……」

そうつぶやくと股をひらき馬乗りになってぐっ、と腰を下ろした。色白の彼女のそこはピンクにそまっている。メイはいっぱいにふともをひらき、じゅつぶんに見せ付けると、おれのものを片手でじぶんの割れ目へとさしまねいた。

葉陰

ずぶりと根元までつきささり、彼女は目を閉じた。そのまま腰を小刻みに上下させる。

「うっ、うっ、うっ！」

必死になって唇をかみ締め、顔をなんども左右にふっていた。やがてその動きが激しさをまし髪の毛をふりみだす。メイのふたつのふくらみが重そうにゆさゆさと揺れている。レイがメイの背後にまわりこみ、そのふたつのふくらみを驚づかみにして揉みあげた。メイは首をねじまげ、レイとディープ・キスをかわす。

ああああっ、と叫ぶとそのままあおむけに倒れこんだ。

メイの股間からおれのものが引き抜かれ、そのまま天井をさしておったっている。

レイはにやりと笑うと膝をつき、手をつかってそれを握りしめた。やさしく手コキしてくれた。

彼女の手がおれの熱いモノをしごきたてる。ぴゅうつ、と先端からしろい液体がはなたれた。

あわててレイは口を寄せ、おれのはなっただものを舐めとってくれる。

ふうーっ、とおれは息をはいた。

身体中の精気を吸い取られた気分だ。

おれはふと風呂場のガラスに目をやった。風呂場は全面ガラスにおおわれ、外は丸見えである。

外は熱帯林になっていて一面の緑である。

その緑の葉陰からこつちを見ている目を認めた。

ナナだった。

彼女は葉陰から身をのりだし、じつと風呂場のおれたちを見ていた。はっ、はつと息をあらげている。右手が股間にのびさかんに手を小刻みに動かしていた。

おれと目が合うと彼女はさつと身を翻し、森のなかへ姿を消した。彼女の尻尾がひらひらと上下に動いていた。

車椅子

おれは博士と朝食をとることが習慣になっていた。

博士は日、一日と具合が悪くなっているようだった。歩くだけでもつらそうで、とうとうこの日は車椅子に乗って食堂にあらわれた。

「そうか、日本はいまそうになっているか」

博士はつぶやくと水をひとくち飲んだ。食欲があまりないようだった。目がおちくぼみ、瞳はどろんと濁っている。顔色はどす黒くなり、首ががっくりとたれていた。博士が朝食にわざわざ出てくるのはおれから日本のことを聞き出したいらしい。博士の日本にたいする知識はかたよっていて、いったいこの老人は島で暮らしはじめでどのくらいの年月をすごしているのだろうと思った。

博士はじろりとおれを見た。

突き刺すような視線だった。

「きみはいまでも帰国したいかね？」

おれは一瞬くちもった。

「え……ええ。そうです。帰国したいですね」

「そうでもあるまい」

博士はにやりと笑った。わかっているぞ、というような笑みだった。

「娘たちがきみにじゅうぶん楽しみをあたえているのではないかね？」

おれは真っ赤になった。

「きみはもう知っていると思うが、わしのところにいる娘たちはちよっと変わっている。たとえばこれだ」

そう言つと手をのばし、背後にひかえていたメイド服の娘のひと

りの尻尾を持ち上げた。

「この尻尾は彼女たちの尻から生えている。ちゃんとこのなかには骨があり、筋肉もあるから自在に動かせる。ようするに人間以外の哺乳類の尻尾とおなじだ。なぜだかわかるかね？」

「さ、さあ……わかりません」

「人間じゃないからだよ！ 文字通り、彼女たちは人間ではない」

おれはぼかんと口をあけた。いったいこの老人はなにを言わんとしているのか。

諸尾博士はぜいぜいとあえいでいた。額からだらと大量の汗がながれている。いまにも倒れそうだったが、気力でこらえているらしく、車椅子の肘掛をがっしりと恐ろしいちからで握りしめていた。

「ついてきたまえ。説明しよう」

博士は手をあげた。車椅子を娘のひとりが押して食堂をでる。おれは興味をそそられていた。たしかにこの島には謎がある。

胎児

食堂を出ると博士はおれを建物から離れたところに建っている別棟へ案内した。

体育館のようなつくりの、天井が高い建物だった。窓はなく、しめきった室内は真っ暗だった。

ドアは二重扉になっていて、博士は外扉がしつかりと閉められているのを確認するとはじめて内扉を開けた。内扉をあける直前、わざわざ明かりのスイッチをきり、真っ暗の状態にしてから開く。

「これをかけたまえ」

博士はおれにゴーグルを渡した。スイッチがあるので手探りにいれると、ぱちりと音がしてたちまち真っ暗だった視界が明るくなった。しかしそれには色はなく、白黒の世界だった。

「赤外線ゴーグルだ。この部屋にはいっさいあかりはいれておらん」
見えてきたのはずらりとならんだガラス容器だった。容器のおおきさは高さが一メートルくらい、幅もそのくらいある巨大なもので、なかには液体が満たされている。液体のなかにはなにかぶよぶよとしたものが浮かんでいた。

室内はじつとりと暖かく、湿気ていた。

顔をちかづけのぞきこむと、そのかたまりのなかに赤ん坊のようなものが浮かんでいた。かたまりからはふとい血管がのびて、ガラス瓶のそこにつながっている。手をガラスに触れさせると、どくん、どくん、という鼓動が感じとられた。

おれは博士をふりかえった。

博士もまたゴーグルをかけおれを見上げていた。口許がゆがみ、にたりと笑いかたちをつくった。その笑みは悪魔的といったいいものだった。

「赤ん坊だよ。これは人工子宮だ。この島の娘たちはこの人工子宮で産まれてきた」

「そんな……」

おれはぼうぜんとなった。

そんなことができるのだろうか？

「胎児に外光は禁物だ。目の発達が阻害されるからね。ここではかならずこのゴーグルをつかわないといかん」

博士は車椅子の向きを変えてふたたび建物の外へおれをつれだした。もとの建物へもどるとこんどは研究室に案内した。

遺伝子

博士の研究室は最先端の遺伝子工学研究所のようだった。マジック・アームのついた作業台があり、いくつものコンピューターがならんでいる。研究室のまんなかに巨大な装置がでん、とおかれていた。

「これがわしの研究の成果。わしはこれに遺伝子エッチングマシンという名をあたえておる」

「遺伝子エッチング？」

「そうだ。やってみせるから見ていたまえ」

博士はキーボードのところへ椅子を移動させるとマシンのスイッチを入れた。モニターがあかるくなり、ねずみのような生き物のCGが表示された。博士はキーボードとマウスをたくみにあやつり、CG画像をのぼしたりひっぱったりしてまったくべつの生き物の姿をつくりだした。

「これはもとのねずみとぜんぜん違う生き物であることはわかるな？」

おれがうなずくと博士はキーボードをたたいた。

べつのモニターにずらずらつと無数のアルファベットが表示された。

「これがいまの生き物の遺伝子塩基配列だ。こっちに以前の配列を表示すると……」

ふたたびべつのアルファベットが表示される。

その表示されたアルファベットの一部の文字列がちかちかとまたいた。よく見ると、文字の一部が入れ替わっている。しかしほとんどの文字列はもとのままで点滅していなかった。

「まるでべつの生き物であるのに、もとの配列との差はわずか数パーセントにすぎない。この装置はわしがづくりだしたあらたな生物に必要な塩基配列を計算し、組み上げてくれる。あとはこの配列の遺伝子をつくりだし、あの人工子宮で育てればいい」

「それじゃあ、まさか……」

「そう！ この島の娘たちはわしがさまざまな動物の遺伝子からつくりだした人造生物だよ。もとはペットや家畜だったのだが、わしの手によってこの世に生まれてきたのだ」

狂ってる……

おれは老人を見つめた。

諸尾博士はそんなおれを見上げ、にやりと笑った。興奮が一時の生気をかれにあたえているようだった。

「見かけは人間の女そのものだが、彼女たちはもともとは動物だ。たとえばそのメイ……」

博士は指さした。

メイはきょとんとこっちを見ている。

「彼女のもとの遺伝子はホルスタイン牛のものだ。あの巨大な胸を見たまえ。あんなおっぱいをしている女をきみは見たことがあるかね？　そしてキイ」

キイが顔をこっちへむけた。

「彼女の遺伝子のもとは犬のチワワ種をつかつておる。背丈はあんなにちいさいのに、胸も尻も女性器もすでに大人だ。レイは羊の遺伝子をつかった。そしてヨウ。彼女の遺伝子は豚のものだ。あんなに太ると思わなかったが……だがああいう太った女が好みの男もいることだからよいでしょう」

「そんなことして、どうするんです」

「知れたことさ！ わしはいつかこの女の子たちを日本へ送り出すつもりだ。彼女たちの頭にあるのは男に奉仕したいというそれだけしかない。わしはかつて青年時代、愛した女から手ひどい裏切りをうけた。そして誓ったのだ。絶対男を裏切らない女を作り出してやろうと……きみ、もし彼女たちが日本でふえて、男たちの召し使いとして生きるようになったらなにおおきく思うね？」

「さ、さあ……」

「日本の高慢ちきな女たちに復讐してやれるのさ！ この島の女はそこらの女よりずっと可愛いし、ずっと従順だ。日本の男という男が、彼女たちのとりこになるだろう。そのとき男を馬鹿にした、自分勝手な女たちは青ざめるのさ。そしてこの島の女たちに対抗して従順になるだろう。その日のくるのが楽しみだが、悲しいかなわしはそれまで生きてはいられまい」

早口で喋り続ける諸尾博士の口の端にしろく泡がついていた。喋り終わった博士はぜいぜいとあえいでいた。おおきく肩がなみうち、ひどく疲労しているようだ。

「じゃ、彼女たちはもとは犬や豚……」

おれはつぶやいた。

うへえ！ 知らぬとはいえ、獣とまじわっていたのか！ 獣姦なんて、おれの趣味ではない。

博士はぐいつ、と手をのばし、おれの腕をつかんだ。おどろくほど強いちからで握ってくる。

頼み

諸尾博士は必死になっておれに掻き口説いた。

「きみ！ 頼みがある。この娘たちを日本へ連れて行ってくれんか？ わしはこんな身体だ。日本への長旅は無理だろう。日本にいたら彼女たちは勝手に増えてくれる」

「増えるって……？」

「生殖機能があるということだ。彼女たちは子供を産める能力がある」

「そ、それじゃあ……」

おれは彼女たちとつぐにセックスしている。おれの子供が生まれる可能性があるということか！

おれの顔色を読んで、博士は違う違うと手をふった。

「きみと彼女たちのあいだで赤ん坊ができるわけないだろう。種が違うからな。彼女たちだけで生殖できるんだよ。これを見てもらいたい」

博士はリモコンをとりあげるとビデオを動かした。モニターにふたりの少女が裸になってからみあっている。なんだ、ただのレズもののアダルトビデオかと思っていたら、彼女たちに尻尾がついていることに気づいた。彼女たちはその尻尾をおたがいの女性器につきさした。ぐいぐいと尻尾が割れ目につきささり、前後に動いている。やがて彼女たちは絶頂にたったのか身をのけぞらせ動かなくなつた。

場面が変わり、さっきのふたりがふくらんだ腹を幸せそうにさすっている。

「彼女たちの尻尾は生殖器になっている。わしは彼女たちに両性具有をあたえた。ナメクジなどとおなじ生殖方法だな。尻尾から人間でいえば精液が放出され、卵子と結合して遺伝子が交換される。妊娠期間は三ヶ月。出産してからわずか五年で成人となり、生殖可能になる。いまきみの前にいる女たちはほとんど五、六年前に生まれたものたちだ。知能もまたそのくらいで成長する。いまここにいる娘たちは数人だが、日本で増殖すれば十年もたたないうちに爆発的に増えるだろう」

「そんなこと……」

おれは首をふった。そんなこと、おれにおつかぶせるな！ と言いたかった。

「お願いです。博士の頼みを聞いてください！」

だしぬけにメイがおれの手をとって叫んだ。ほかの女の子もいつせいにおれにむかい、博士の願いをかなえてくださいと唱和する。

「きみたち……」

「あたしたち、博士の言いつけならなんでもします！ 日本に行つて、たくさんたくさん子供をふやして、男の方といっぱいいっぱいセックスしたいんです！」

おれはぼうぜんとなっていた。

彼女たちの博士にたいする忠誠心は異常といつていい。

「この島の女の子全部ですか？」

「そうだ、メイド全員だ……」

「森の中でくらしている娘はどうするんです？」

博士は仰天した。

「どこでそれを知った！」

おれは浜辺でナナという女の子と出会ったことを話した。おれの話しに博士は苦い顔になった。

「あいつらか！ ありゃ失敗作だ」

「失敗作？」

「そうだ。理想的な召し使いになる女をつくるため、わしはいろいろ遺伝子を操作した。主体性がなさすぎると命令してもなにひとつできん。しかしあまり主体性をあたえすぎると反抗するようになる。そのバランスが難しくてな。ようやくここにいるような、男の命令には服従するが、じぶんの頭で考え、命令をはたすような種をつくりだすことができた。森にいる女どもは、このバランスが悪くてわしの命令を拒否して、勝手に森のなかへ逃げ込んで暮らしている。あいつらは猫や狼などの遺伝子を利用してつくったんだが、やはり性根は野生そのものだ。ここにいる娘たちは犬や豚、牛などの古来家畜として人間に本能的に服従する性質が強い動物をつかっているから理想的な召し使いとなった……」

「ずいぶんためしたんでしょね」

「ああ、ずいぶんいろいろためした。ながかったな……森にいるやつらは考えなくていいよ。ここにいる娘たちだけでじゅうぶんだ」
ゆるゆると首をよこにふった。

そこで博士は娘たちに愛情といていい視線をなげかけた。彼女たちはほこらしげにほほをピンクに染めている。

「こいつらを頼む……」

そこまで言って博士の体力がつかたのか、だしぬけにちからがぬけた。おれの腕をつかんでいた手がだらりと降りて、博士はがくりと首をたれた。

おれは膝をつき、老人の顔をのぞきこんだ。

薄目をあけた目が、白目になっている。どうやら気を失ったようだ。

「博士！」

女の子たちは悲鳴をあげて博士のまわりに集まった。レイが博士の額に手をやり、脈をとった。

「たいへん！ 治療室へ！」

レイの指示で彼女たちは博士の車椅子を大慌てで運んでいく。
メイが残った。

彼女はおれをじつと見つめた。

「お願い……博士の頼みをかなえてあげてください」

うるうるした目でおれを見上げた。

おれは立ち尽くしていた。

いったいどうすればいいのか？

だいいち、おれはまだ博士の言ったことを信じられないでいた。

ナナ

森は予想に反し歩きやすかった。したばえはあまり繁茂しておらず、踏み分け道が森の奥へつついている。

諸尾博士はあれ以来治療室で女の子たちの看護をうけていた。さまざまな点滴のチューブがささり、鼻には人工呼吸器がつけられていた。ここのメイドたちは看護師としての訓練も受けているのだそうだ。

おれはナナを捜していた。

博士の言葉を耳にしてからというもの、彼女にたいする関心は強まっていた。

歩いていくとどうどうという滝の音が近づいてくる。

滝だつて？

こんなちっぽけな島にどうして滝があるんだろう。

ひやりとした冷気が身体をつつむ。

確かに滝だった。高さ十メートルほどの、ちっぽけな滝だったが、しろい瀑布がながれおち、滝つぼにしろい飛沫をあげている。滝つぼの近くには数人の女の子が思い思いのポーズでくつろいでいた。みな裸か、裸にちかい格好だ。肌は日に焼け、髪の毛は伸ばしっぱなしにしている。彼女たちのひとりがおれを見つけ、指さした。するとこのりの女がいつせいにおれを見上げ喚声をあげた。

きゃあきゃあと騒がしく、彼女たちは立ち上がるとこっちへかけてくる。走ると胸のふくらみがゆさゆさとゆれていた。彼女たちも

またさまざまな長さの尻尾をもっている。ふさふさしたの、ほっそりとしたの、あるいはほとんど尻尾というより毛のかたまりのようなちょこんとしたもの。いろいろだった。

「男よ！」

「男のひと！」

「博士のところにいるひとね！」

「わあ、よく来たわね。ねえねえ、こっちへ来て！」

ひとりがおれの腕をつかみひっぱる。

おれは彼女たちに取り囲まれ、淹つばへ案内されていった。

「きたわね」

ナナが近づいた。

ひた、とおれの目を見つめている。

おれは彼女の目をよく見た。

瞳孔が縦にながい。猫の目のようだ。

するとやつぱりここの女たちは博士の遺伝子工学によって生み出されたのだろうか？

「聞きたいことがあるんだ」

「まあ、すわって。立ち話もなんだわ」

おれはひらたい岩のうえへ腰を下ろした。岩の表面は日にあたって、暖かい。ナナはおれの正面に横座りになった。長い両足がすりとのびている。

「博士が屋敷にいる女の子たちを日本に連れて行きたいといっているんだ。きみたち、それを知っているのか」

「知ってるわ。日本で、あの娘たちをふやす計画なんですってね」

「きみらはどうなんだ？ 一緒に行きたくはないのか？」
するとナナの瞳が熱意をおびた。

「あたしたちは行かないわ。ここに残るつもりよ」

「なぜ？」

つん、と顎をあげ彼女は肩をすくめた。

その仕草がきまっている。もし日本で女優になれば、たちまち成功しそうだ。

「だって日本に行けば、あたしたちは所詮男たちのおもちゃになるしかないわ。遣伝子からも人間とはいえないし、それにいくらあたしたちが勝手な行動をとれるといったって、男たちの前に出て、意思を通せるかどうかわからないもの……あたしたちの自由意志なんて、たいしてないのよ」

「残ってどうする？」

「あたしたちは博士の機械をつかってあたらしい種をつくりだすつもり。人間に言いなりにならず、人間以上の存在に進化するの。そしていつの日か、この島から脱出してじぶんたちの国をつくるのよ」

おれは黙って彼女の顔を見つめた。

あの老人が気が狂っていると思ったが、ここにもいた。

洞窟

「信じられない」

おれはつぶやいた。

ナナはするどい目つきでにらんだ。

「どういうこと？」

「諸尾博士の言うことがすべて出鱈目だということもありうる」

「なぜ？ あたしたちはここにいろわ」

「もしかしたらきみたちは博士の催眠術にかかっているのかもしれない。適当な薬をつかえば、簡単に洗脳できるしね。その尻尾だって、特殊メーキャップかもしれない」

「どうしてそんなことをする必要があるの？」

ナナはじぶんの尻尾をふりかえった。

ふらり、ふらりと尻尾は左右にゆれている。

「博士の妄想から生まれたということもありうるからね。聞くところによると博士は若いころ女からひどいあつかいをうけたらしい。そのトラウマからこんなことを思いついたのかもしれないじゃないか」

くつくつくつとナナは笑い出した。

「馬鹿ねえ。そんなこと考えていたの？ わかったわ。それじゃ、あたしたちがほんとうに博士の手によって生まれたことを証明してあげる。疑いようのない証拠を見せてあげるわ」

すつ、と立ち上がると彼女はおれの手をとった。

「いらつしゃい。いいものを見せてあげる」

ナナはそう言うのと滝つぼへおれを誘った。

「おい、おれは……」

つぶやくそのとき、だしぬけにおれの背中を後ろにいた女のひとりが押した。おれはたまらず水の中へつつこんでしまった。

うひゃあ！

氷のようにつめたい。

背中でおれをゆびさして娘たちがわらいさざめいた。

あはは、あはは……と彼女たちの笑い声が岩場に反響している。

顔を水からだし、おれは咳き込んだ。あははは、とナナは笑った。おれはかっとなって彼女を追いかけた。

「おい、まて！」

きやあきやあと笑いながら、彼女はおれの手から逃れようと泳いでいく。おれはむきになって追いかけた。

ナナは滝つぼへ泳いでいく。彼女のすがたが滝の向こうへ消えた。すい、すいと手足で優雅に水をかきおよいでいく。

おれはというと、どたばたと不恰好に手足を動かしておよいでいった。滝にちかづくあたりには瀑布がたちこめた。

ざあああつ、と追いかけたおれの頭から水がなだれ落ちた。

「おい、どこだ！」

おれは怒鳴った。

どうどうどう、と鳴り響く滝の音にまじり、ナナの笑い声が聞こえてくる。彼女の声は奇妙に反響していた。

滝をくぐりぬけたところに洞窟があった。

洞窟のおくにナナがたち、おれを見つめている。

滝の裏側に洞窟だって……

まったく、なんて月並みなんだ。おれは秘境冒険映画の主人公じ

やないってんだ！

「こつちよ！」

ナナはさけんだ。

ぶるぶるふるえながら、おれは洞窟のなかへ踏み込んだ。
真っ暗だ。

奥へ、奥へとナナの姿をもとめ、おれは歩いていく。

「こつち、こつち！」

彼女の声が洞窟にひびく。

巨女

なんだろう……

おれは立ち止まった。

奥からなんだか暖かい空気がながれてくる。生暖かい、といったいいい。

それにあたりが明るくなってきた。すくなくとも足もとは確認できくらいだ。

ばかりと広い洞窟にでた。

ナナが立っていた。

彼女のそばにプールほどある水溜りがあった。ひかりは水溜りの底から発している。おそらく水底で外界と接していて、ひかりはそこからもれているのだろう。水は澄んで、底まで見えそつだ。

水の中になにかいた。

巨大なものだ。

それはゆっくりと水中をおよいでいた。

馬鹿な！

そんなことがあるわけない！

それは人間のかたちをしていた。ただしそのおおきさがなみはずれている。おそらく全長十メートルはあるだろう。

「出てくるわよ」

ナナが宣言した。

彼女の言葉どおり、そのものは水面に近づいてきた。

がばあ……、と水面がおおきくわれ、波立つとそのものが顔をだ

した。

女だった。

巨大な女が水面に顔をだしてきた。

水底からの青白い光に照らされ、その女の肌はなまじろくひかっている。

彼女はゆっくりとおれを見た。

その瞳に見つめられ、おれは身を固くしていた。

彼女の顔はきわめてととのっていた。卵形の顔に、目鼻が理想的な配置でついている。まっすぐな眉に、きれながの両目。髪の毛は黒々としてべったりと顔にはりついていて、おれはボツティチェリのビーナスの誕生という名画を思い出していた。彼女のとのった顔立ちは女神そのものだった。

「よくきました……あなたのことを聞いて、いちどお目にかかりたいと思っていました……」

ゆっくりと彼女は喋りだした。おれはがくりと膝をおった。

ほんのすこし喋っただけだが、おれは彼女が圧倒的に知性をもった存在であることを悟っていた。彼女はにっこりと笑みをうかべた。さあ、と身をおこすと波のうえに上半身をさらした。彼女の肌は海水にひたされ、ぴかぴかとひかっていた。

「水の中から失礼します。わたしは水の中から出ることはできないのです。水の浮力がないと、体重をささえることができないので。もし全身を水からだしたら、わたしの骨はじぶんの重みでおれてしまうでしょう。よろしければ、こっちへきてくださいますか？」

彼女は腕をこっちへのばした。

おれはふらふらと立ち上がり、水の中へ身をおどらせた。彼女の

言葉にまるでさからえなかった。その両目に見つめられただけで意思のちからを奪われたようだった。

彼女はおれの身体をつけとめ、その胸にかかえあげた。ふたつの胸のふくらみがおれの両側からせまってくる。おれは彼女の胸の谷間に身をうめていた。

わあ！

暖かい……

まるでやわらかな毛布につつまれたような感触だった。彼女の肌は燃えるように熱かった。

「暖かいでしょう？ わたしはこんなおおきさだから、体内から発生する熱も大量なんです。水の中にいなければならぬ理由もこのためなんです。たえず水に熱を排出していなければ、わたしは自分の熱で死んでしまうかもしれません」

なみだつ水面は彼女の体温であたたまっていた。このせいで洞窟のなかがあたたかいのかもしれないかった。

おれは夢中になって服を脱ぎ捨てていた。ふたつのふくらみが完全におれの身体をつつみこみ、その感触にうつとりとなった。おれは全身をつかって彼女の胸のふくらみを感じていた。

ふふふ……

巨大女はそんなおれを母のような眼差しで見下ろしていた。おれはなにもかも彼女にまかせきったような、幼児のような気持ちになっていた。彼女は岸ちかくの水溜りに背泳ぎして近づくとあおむけになった。その場所なら彼女は水を半身ひたしたまま仰向けになれるらしい。

おれは小山のような……いやじつさいそれくらいはある……ふくらみにのぼり、その乳首を吸いつけた。彼女の乳首は全体からすれば小さめだったがそれでもサラダボウルくらいはあった。

おれは顔全体を乳房にうめた。

ぷはあ！

すげえ！

ひくり、と彼女が身動きをする。

と、ふたつのふくらみがぶるんとゆれた。おれは夢中になって彼女のふくらみに肌を押しつけ、身体をすりつけていた。

彼女は股をひらいた。

おれは彼女の股をみおろした。

どうしろ、というのか？

問いかけるように彼女の顔を見ると、にっこりと笑いかける。おれは悟った。

おれは裸のまま彼女の胸から、そして腹へとすべりおちた。肌はぬれてつるつるとすべった。

おれの目の前に彼女の割れ目があった。

おれはごくりとつばを飲み込んだ。

オナニー

ようし、とおれは足のさきを割れ目へつきさした。

ああ……、と巨大女はあえいでいた。

ぐい、と片足がはいる。両手を彼女のふとももにかけ、両足をそろえた。

すっぽりとはいった。

そのままぐいぐいと両足をいれていく。

女のおいが充満した。割れ目からたらりと透明な愛液があふれます。おれはその液に全身をひたしつつ、両足をつきさした。

ついに腰まではいった。下半身がすっぽりと彼女のなかへうまっている。おれの下半身は彼女のあたたかな襪につつまれていた。おれは腰を前後に動かしてやった。

ずぶずぶと大量の愛液があふれます。さらに身体をつきさしていく。

おれは胸まではいつていた。

目の前に彼女のクリトリスがある。

おれは首をおこし、そのクリトリスを口にふくんだ。夏みかんくらいはあるそれは、口からあふれている。おれは両手をそれにかけ、ぐいぐいとねじりあげた。

ああああっ！

女は吼えていた。

彼女の声が洞窟の中に反響していた。おれは両手と口をつかつて彼女を責めたてた。

うまったおれの身体はぎゅううつ、と締め付けられていた。膣がしまり、おれの全身は女そのものに抱きしめられているような感覚にひたされた。おれは彼女のなかにうまった両足をばたつかせた。蹴り上げる両足はぐにやぐにやとした肉にやわらかく吸い込まれるようだった。

いや、ほんとうに吸い込まれている。

ぐつ、とおれの身体が沈み込んだ。首が、そして顎までうまった。そこではじめて恐怖がこみあげた。抜け出せない！

「わあ！」

おれは悲鳴をあげた。

おれの声にナナがはっとなって駆け寄ってきた。

「た、たすけて……」

首が、そして顎がうまっていく。

とうとう頭まですっぽりと吸い込まれた。

息ができない！

手がかりをもとめ、巨大女の身体をつかむがつるとすべってつかめなかった。

ひっしになって足を彼女の体のなかでばたつかせるが、かえってそれが快感をふかめたようだ。大量の愛液におれはつつまれ、つるりとなかへ吸い込まれる。

おれは手をのばした。ナナは顔色をかえ、おれの腕をつかんだ。

ぐつと足をふんばり、引き抜きにかかる。

ずぼり、とおれは巨大女から引き抜かれた。全身が彼女の愛液でどろどろになっている。大量の液がおれの全身からしたたり、糸をひいていた。

おれは這い出した。全身からほかほかと湯気がたっている。まるでおれは生まれたての赤ん坊のようだ。

「ふう、驚いた……」

おれは腰をぬかしていた。女のあれに吸い込まれそうになるなんてはじめての経験だった。

巨大女はおれが引き抜かれたことに気づかず、火のついた欲望をもてあましているようだった。指を股間にもっていきクリトリスをじぶんで慰めている。

おおおお……！

彼女の声が響き渡る。おれはその音量に耳をおさえた。

しゅうしゅうと彼女のまわりからしろい蒸気がわいてきた。彼女の体温であたためられた水が蒸発しているのだろう。しろい蒸気のなか、身長十メートルという巨大な女がオナニーをしているのだ。彼女の手の動きでがばがばと水面は波立ち、地面は振動していた。なんてすごいオナニーなんだ……おれはあきれていた。

「行こう。もうあたしたちのことなんか気にしていないよ」

ナナにうながされ、おれはうなずいた。ふたりで洞窟から滝つぼへ戻った。ナナはおれのぬぎすてた服をひらりと拾い上げた。

滝をくぐりぬけ、もとの光のあふれた岩場へともどる。

フェロモン

おれはへとへとに疲れていた。
なんて経験をしたんだろう。

「あれが証拠なのか……」

「そうよ。彼女はつくりものだった？」

「いいや、とおれは首をふった。あれがつくりものであるものか。

「なんであんな巨大な女がいるんだ」

「博士の実験よ。博士はどのくらい巨大な女をつくれるか実験したの。でもあまりにおおきいで、たったひとりだけつくってやめにしたわ」

おれはぞつとなった。もしあんな巨大女が複数いたらどうなるんだ？ あんなのが生殖して増えたら大変なことになる！

「もとはなんだったんだ？」

「クジラだって」

「クジラ！」

クジラを人間の女に改造したのか……なんて馬鹿なことをしたんだ。

「でも彼女、すごい知能の持ち主なのよ。あたしたちがここで暮らしはじめるきっかけだって、彼女がすすめたの。彼女が言ったの。あたしたちは人間とかかわらず、独自に暮らすべきだって」

「きみらの指導者ってわけか」

あれだけのおおきさだ。脳は人間の何倍もあるのだろう。そのふえた脳であの女はなにを考えているのだろう。

そんなことを考えているうち、おれはある異変を感じていた。

いつのまにか勃起している。

ナナを見る。

彼女はうすら笑いを浮かべている。

ふいに彼女が欲しくなった。

彼女の胸元……その谷間に目がはなれない。

「あたしが欲しいの？」

彼女がささやく。おれはかっとなんが熱くなった。

なんなんだ、これは？

おれは彼女にむしゃぶりついた。わななく両手で彼女の身につけた薄着をひきはがそうとするがうまく手が動かない。おれは情けなさにつめいた。

ナナは自分から服をぬいだ。

つややかな肌がそこにあつた。おれはその肌に顔をうずめた。欲望がおれの頭を煮立たせている。ナナは岩場にあおむけになると足をひらいた。おれは腰をつきだし、ペニスを割れ目にあてがった。

先端がふれただけで精液がほとばしる。

ふん、とおれはのけぞった。まだまだ欲望はとまらない。なんとかしてもペニスを彼女のそこへ突き立てたかった。ナナはやさしく手をあてがっておれのを誘導してくれた。割れ目に根元まで突き立てると、おれは気が違ったように腰を動かしていた。

おれは三回も氣をやっていた。

ようやく身体をはなすと、おれは岩場にあおむけになったままペニスをとおったままぼうぜんと立っていた。

ナナが顔をよせ、おれのものを口にふくんだ。亀頭からはまだ液

がほとばしったままとまる気配もない。ナナはおれが放出した液を
ひとしく残らず飲み込んだ。

ようやく欲望がおさまり、おれはばかんとしたままねそべっていた。

「よかったわ」

くく……、とナナは岩場で身体をのばした。満足した猫のような
仕草だ。のどがごろごろとなっている。猫のような音だ。

おれは彼女に話しかけた。

「きみは猫の遺伝子をもっているそうだな」

「そうよ」

「おれになにをした？」

「こわい顔しないでよ。あたしだって男の味を知りたかったんだもの。いいじゃない」

「なにかしたんだろう？ 言えよ」

「あたしは猫の遺伝子をもっているわ。ジャコウネコのね」

「ジャコウネコ……」

「そう、麝香という香水のもとになる猫よ。麝香とはフェロモンの
ことだと知っていたかしら？」

フェロモン！ おれは彼女のフェロモンで欲情していたのか！
なんて情けない。

「服着なさいよ。戻るんでしょ」

気がつくとなナはおれの脱ぎ捨てた服を持ってきていた。おれは
体中にこびりついた愛液を滝つぼの水で洗い流し、服を身につけた。
一生わすれられない経験だった。

「ああそつだ。言い忘れていた。きみらは博士が危篤なのを知っているかい？」

「えっ！」

ナナの表情が驚愕にゆがんだ。見る見るその目に涙が浮かんた。

「博士、具合が悪いの？」

「そつだ。ベッドに寝たきりで、ほとんど意識がない」

「そんな……」

ナナの唇がふるえていた。

「どうしたんだい。きみらは博士と袂をわかつたはずじゃなかったのか？」

「でも、博士はわたしたちの造り主よ。わたしたちは博士に育てられたのよ！」

父親つてわけか。娘が父親の危篤にこころ乱しているというわけである。

「きみたち、見舞いにくるかい」

ううん、とナナは首をふった。

「あそこにいる娘たちがあたしたちを博士に会わせてくれるはずないわ……彼女たち、あたしたちを憎んでいるもの」

「それじゃ行くぜ」

おれは立ち上がった。ようやく元気がでてきた。ナナはおれを見上げた。

「博士の願いをかなえてくれない？」

「あの娘たちを日本へつれていくつてあれか？」

「ええ。それが博士ののぞみなんでしょう？ それをかなえてほしいの」

「考えておく」

おれは道に戻っていった。いつのまにか夕方になっていて、夕日が森のなかに差し込んでいた。

おれは考えていた。

どうすればいいのだろう。おれは博士の言葉がただの妄想ではないという証拠をこの目で見た。娘たちを日本へ連れて行けばたちまち彼女たちはお互い愛し合い、数をふやすだろう。彼女たちには本能的に男に奉仕したいという欲望がある。男だってそんな女がいれば、さらに日本ではアイドル並みの可愛い容姿の娘がじぶんにつくしてくれるとなれば夢中になるはずだ。そんな女たちを連れて行ったらどうなるか、おれはその結果の責任をとりたくはなかった。

本性

博士が倒れてから娘たちの態度が変わった。それまではおれにたいし控えめな態度だったのが、がらりと積極的になった。

博士の面倒は二、三人が交代で見ることになり、のこりの娘たちはおれのまわりに集まった。屋敷のなかをどこにいくにも彼女たちがとりまき、おれの一挙手一投足を見守っている。

おれにたいし、無理やり愛の行為を強制するということはないがなるべく近くにいて胸や尻がおれの身体に偶然をよそおってふれるようにへばりついてくる。おれの肩や手先が彼女たちの身体のどこかに触れると、彼女たちはおおげさにあえいだり、ふーっと息をはいたりしてアピールするのだ。

メイド服のうえから胸や股間をさわり見せ付けてくるやつもいる。おれを見る目はいつも熱っぽく、うつとりとなっていた。そのなかでもメイはとくに積極的だった。最初におれの愛を受けたという優越感からか、彼女は博士の見舞いもせず、一日中おれのまわりにへばりついていた。

「ねえ……」

メイが甘い声でおれにもたれかかってきた。娘たちのなかで一番の巨大なおっぱいを背中にしりつけゆっくりと上下にゆするようにこすりつける。

おれは博士の日記を読んでいた。諸尾博士はこの島で暮らしてはじめて三十年になり、そのほとんどの日にちを記録している。たいていは天気の様子だとか、研究の進捗状況だったが、ところどころこの島で生まれた娘たちの成長記録もはさみこんでいた。

研究に関する記録はおれの手に負えなかったが、娘たちに関する成長記録はおれの興味をひいた。

たしかに博士の言うとおり、娘たちはおそろしいほどのスピードで成長していた。たった数ヶ月で幼児期を脱し、二、三年で初潮をむかえている。

「なんだよ……」

おれは生返事をした。

「ねえ……」

もう一度、メイはおなじ問いかけをしてくる。声がやや裏返っている。おれの背中にすりつけるおっぱいの動きが激しくなった。ふうふうという彼女の息があらくなった。

しゅるしゅるという衣擦れの音がしてメイが服を脱ぐ気配がした。と、どきりとおれの両肩に彼女のおっぱいが乗せられた。おれの両方のほほに彼女の乳房がふれている。とうとうメイは我慢ができなくなったとみえる。ぐーっと両手で胸をよせ、おれの顔を乳房ではさみこんでいた。こんなことできるのはメイだけだ。もつともヨウもおなじことができるが。

「もうっ、知らない！」

メイはベッドに身をなげだすと身悶えた。そのままじぶんで乳房をもちあげ、その乳首をじぶんで吸った。スカートをまくしあげると股間を激しくこすりあげた。

ちえ、そんなのを見るとおれだってむらむらしてくるじゃないか。

と、部屋のドアがかすかに開いているのに気づく。すきまからだれかがのぞいている気配がした。

だれかなと思ったらキイだった。

えへへ……、とキイはぴよこりと顔をのぞかせた。

「ちようどいい。こっちへおいで」

はあーい、とキイはちょこちょこと小走りになっておれに近づいた。

おれはじぶんの股間をゆびさした。メイのオナニーを見てふくら

んでいる。

キイはにこりとなって膝まづいた。そのまま口をあぐりと開け、おれの勃起したそれをくわえる。ちいさな両手でささげるようにすると熱心に舐めあげた。大きな瞳におれの顔が映っていた。

彼女は口するのが好きである。なるほど、確かにチワワの遺伝子がいっている。

ぺろぺろぺろ……

ぺろぺろぺろ……

キイは熱心に舐めつづけた。

メイは激しくじぶんの股間をこすりあげている。

ぴちゃぴちゃぴちゃ……

股間からたつぷりと愛液があふれ、淫靡な音を響かせている。

もおおおっ！

メイがさげんだ。

なるほど、もとは牛だ。

キイはおれの膝にのぼり、足を開いた。そのままおれのすっきり勃起したペニスにずぶずぶと腰をおろして挿入する。

あああっ！

キイは天を仰ぎ、歯を食いしばった。ちいさな彼女の身体におれのがすっぽりと埋まっていく。

きゃいん、きゃいん、とキイは悲鳴をあげている。

このころメイドたちは興奮すると、もとの動物の本性をあらわす

ようになつてきている。猫からつくられたナナは気持ちよくなるとごろごろと喉をならすし、豚からできているヨウはぶびぶひと鼻をならしていた。

キイの身体の中でおれははてた。

ひくつ、とキイはおれの膝の上で身を震わせた。しばらくじつとしていたが、ようやく足をあげおれのものをひきぬいた。股間からおれの白い液体がぼたぼたと滴っている。彼女は満足したような目になると、舌をのばしておれのペニスについた精液の残りと愛液をすつかり舐めとった。そのあとエプロンからハンカチをだしてぬぐい、きれいにしてくれる。

そのあと身体をまげてじぶんの股間をなめはじめた。おそろしく身体がやわらかく、アクロバットのような格好も苦はないようだった。そういえばナナも同じことができる。

おれは身支度をして立ち上がった。

「どちらへ？」

キイが聞いてきたのでおれは答えた。

「博士に会ってくる」

死相

「メイドたちの様子が変だと？」

ぜいぜいと苦しい息の下から博士はぎょろりと目を動かした。目はおちくぼみ、顔色は土気色になっていた。いわゆる死相があらわれていた。

「ええ、興奮するとともに動物の行動があらわれるんです。ちかごろキイはきゃんきゃん鳴いてばかりだし、メイはどういうわけか反芻のような口の動かし方をしています。先祖がえりをしているんじゃないですか？」

「馬鹿な！」

博士ははきすてた。

「娘たちにはりっぱな人間としての教育をしておる。そんなはずはない！」

興奮したのかごぼごぼげげげと激しく咳き込んだ。ごろごろとのどが鳴っている。看病をしているメイドたちがあわてて駈け寄ると、博士の口にカテーテルをさしこんだ。痰が吸引され、ようやく息が楽になる。

「娘たちの教育は……きみ、彼女たちの学校を見たくはないかね？」
「学校ですって？」

「そうだ、彼女たちはこの島にある学校でりっぱなメイドになるべく、教育をうけておる。わしはそのために学校を建てた。いまでもそこではつぎのメイドに育つべく、何人かが生活しているはずじゃ……こんな身体になって様子を見にいけなくなってしまったが、きみよければわしのかわりに行ってくれんか？　娘たちの様子を教えて欲しいんじゃないよ」

おれはうなずいた。

「わかりました。博士のかわりに見に行きます」

「そうか、ありがたい」

博士はにっこりと笑った。

さいきん、博士は好々爺のような邪気のない笑顔を見せるようになった。死を覚悟したものが見せる笑顔かもしれない。

博士はその場にいたリンとケイというふたりのメイドを指名した。ふたりとも小柄で、目がくりくりと動く小動物の雰囲気を持っていた。

リンはきよろりとした大きな目に、前歯がおおきい。聞いてみるとリスの遺伝子がいっているそうだ。なるほど、顔つきがどこかリスに似ている。

ケイもリンに似ているが、リスの遺伝子ではなく、モモンガの遺伝子がいっているそうだ。彼女のほうが目が大きい。

「ではわたしたちがご案内します」

ふたりはおれの前にならぶと歩き出した。おれは博士の病室をあとにした。

ふりかえってベッドを見ると、博士はすでに眠りに落ち、寝息をたてていた。博士のやせこけた胸にはくつきりと骨がつきでいた。そんな博士は、まるで死体のように見えていた。

サンドラ

前を歩くふたりの娘の尻にはふさふさとした尻尾がはえている。歩くたび、それがぶらぶらとゆれている。

「そんな尻尾があつちや邪魔じゃないか？」

おれがたずねると、ケイがふりかえった。

「いいえ、ちつとも。もしなにかあつてなくなったりしたら、歩きづらいと思いますよ。いぜん、仲間の一人が事故でしっぽを切り取る羽目になつてしまつて、それいらいずっとあちこちにぶつかるようになったんです。聞いたら尻尾がなくて、まっすぐ歩くのが難しくなつたつて言つてました」

ふうん、そういうものか。

ふたりは屋敷のそとへでると、裏手のジャングルのなかへあるいていく。ジャングルのなかには道があつて、やや上り坂になつていた。

十分ほど歩くと開けた場所に出た。

まっさおな西洋瓦の屋根の建物が見える。これが学校らしい。木造の三階建てで、明治の建物っぽい雰囲気がある。博士の屋敷は百年ちかく以前に、もともとこの島に別荘をつくつた華族の住居あとだったそうだ。もしかしたらこの建物もその当時の建物かもしれないなつた。

建物の前は運動場のような庭になつていて、ガラス戸が青空を映していた。

庭にはいろいろな遊具がある。

ぶらんこ、鉄棒、雲梯、ジャングルジム……まるで小学校である。入り口にスリッパがならんでいる。おれたちはそれに履き替えて

中へ入り込んだ。

まぶしいほどの外の光りから内部へはいると真っ暗だ。ようやく目がなれてくると、黒光りする木の梁や、床の木目が見えてきた。いよいよ明治の学校の建物だ。

内部はがらんとしていた。

ふたりの案内で奥へ歩いていくと、どうやら授業中らしい声が聞こえてきた。

「そう、フォークはこちらへ…… スプーンはこちらへおきなさい。そのフォークはサラダ用ですよ！」

教師の声らしい。

廊下のガラス戸のむこうに教室が見えてきた。

木の机がならび、十数人のちいさな女の子がおそろいのメイド服を身につけ、真剣な表情でナイフとフォークを手にとっている。食事のマナーの授業というわけか。

教師の姿を追い求め、おれはぎくりと足をとめた。

おれははじめてこの島で老婆を見た。

まつしろな髪の毛は後頭部で団子にまとめ、ぴんと背中がのびた姿勢のよい、小柄な老女だ。彼女もまたメイド服を着て、鼻にはちいさな縁なしの眼鏡をかけている。

彼女はおれたちの気配に気づき、目をかすかにほそめた。顔つきは日本人のものではなかった。ほそめた目のおくの瞳は灰色にちかいブルーだった。

驚いた様子を見せない。

驚いていても表情に見せないのか、それともおれのことは先刻承知なのか。

どうやらあとのほうらしい。

彼女はゆっくりとうなずくと近寄り、教室のドアを開いた。

「あなたですね、島に漂着した男のかたつて。夫の様子はどうですか？」

「夫？」

おれは驚きのあまり声がうらがっていた。老女はふたたびうなずく。

「そうです、わたしはあの人の妻です」

「でも、でも……博士は若いころ手ひどい失恋をしたと言っていました。てつきり独身だと思っていました」

老女の顔にうつすらと笑いがうかんだ。

「まだそんなこと言っているんですね、しかたないひとねえ……ええ、あの人の失恋話は知っていますよ。あのひとがわたしの故国、イギリスに留学していたころのことです。留学先のホームステイしていた家の娘さんに恋をしたんですが、なにしろあいての娘さんは当時十二才でしたから、恋も何もありません。あのひとはあのころから幼い女の子に目がなくてね。わたしはその家のメイドでした。あのひとが帰国してから日本に追いかけて、押しかけ結婚をしたんですのよ。ああ、申しおくれました。わたしはサンドラといいます。よろしく」

彼女はそう言うときちょっと腰をかがめた。完璧なイギリス式の挨拶だった。

「とても上手な日本語ですね。あなたがイギリス人とは思えません」

おれがほめるとサンドラはちよつとほほ笑んだ。

「なにしろ連れ合いとなつて長いですから……もう、英語もほとんど忘れました」

おれは教室を見回した。

授業中の少女たちはむきだしの好奇心を見せておれをまじまじと見つめていた。十才くらいの年頃に見えたが、彼女たちがメイドとすれば産まれてから一年か二年というところのはずだ。

おれはサンドラをふりかえった。

「あなたはここでこの娘たちの教育を？」

彼女はおおきくうなずいた。

「ええ、あたしはもともとメイドでしたから、娘たちの教育をまかされていますの。楽しい仕事ですわ。彼女たちは性格が素直で、よい召し使いになる資質をもっております。いまだき、このような女の子はなかなかおりませんわ。あの人の夢はわたしの夢でもございますわ。この世の中に理想的な召し使いの娘を送り出す。こんな意義のある仕事はほかにはございません。ねえ、なんでもこの娘たちを日本へ送り出す計画があるそうですね。ぜひ、あなたには夫に協力してくださいな」

老女の瞳が熱意にきらめいた。

彼女もまた別の意味で狂っている。

サンドラは教室をふりかえり、声をはりあげた。

「さあ、みなさん！ 男の方がいらつしやいましたよ！ あなたがたはこのかたにご奉仕申し上げなさい！」

毛皮

はあーい、と少女たちは唱和した。
がたがたと椅子をひいて立ち上がると、おれのまわりにあつま
た。

え？

なにがはじまるんだ？

少女たちはおれの目の前でもじもじとしている。やがてひとりが
服の襟に手をかけ、ボタンをはずしはじめた。

えっ？

おいおい……

いつせいに少女たちは服を脱ぎはじめる。

やがて全員がすっかり全裸になった。

人間の女の子とすれば、十才前後の少女たちのヌードにおれは仰
天していた。

少女たちはまだ胸もふくらまないおさない裸を見せつけるように
して、ゆっくりと近づいてきた。

ほほを紅潮させ、目をかがやかせている。息がはずんでいた。
背後からそつと腕をまわしてきた女の子がいた。

ふりかえると、髪の毛がまっしろで、瞳が赤い女の子がおれを見
上げている。耳がぴよこりとつきだし尻尾はちょこんと丸い。

「その娘は白兔からできていますのよ」

ウサギかあ……成長すればプレイボーイの表紙をかざるようにな
るんだろうな。

ひとりの少女が床にぺたりと座り込むと股を開き、手を押し当てぐいと押し開いた。まだ成長していない彼女の割れ目はつやつやとした光沢があった。彼女はにっこりと笑いかけ、さそうような目つきになった。

おさない指をあてがい、ゆつくりと襷をかきわけすべらせていく。人差し指でちいさな突起を刺激する。

うつ、うつ、うつ……

彼女は快感に眉をしかめ、のけぞった。
ぬるん、と彼女のそこがかすかにうるおっていく。

ぴーっ……

彼女はするどい声をあげていた。

「ここの娘たちはひとりのこらず男のかたに全身全霊をかけてご奉仕するよう教育されておりますのよ。さあ、彼女たちの奉仕をうけてくださいませ」

ゆつくりとお辞儀をすると、サンドラは微笑をうかべたまま教室を出て行った。おれは取り残され、汗をかいていた。

老女が教室を出ると、少女たちはわつとばかりにおれのまわりに集まり、ぎゅつと身体をおしつけてきた。みな小柄で、おれの脇のしたくらいにやつと頭がとどくくらいだ。

「ねえ、あたしを抱いて……」

「いやっ、あたしからよ！」

「あたし、舐めるの大好きよ。ね、あたしから抱いてください」
少女たちは口々に話しかけてきた。

リンとケイを見ると彼女たちもほほを紅潮させ、もじもじしていた。そろそろと胸のボタンをはずし、服を脱ぎだした。

「あたしたち、まだあなたに抱かれたことないわ……」

ささやくと服を脱いだ。

ふたりは小麦色の肌をして、ひきしまったスタイルをしている。胸はこぶりでつんととがった乳首をしていた。背中側にこまかな毛が密生してすじをつくっていた。モモンガから生まれたというケイは手とわき腹にかけておりたたまれた皮膚をもっていた。その皮膚が服を脱ぐとあらわになり、ひろがってマントのようになった。

おれはふたりの背中をなでまわした。

やわらかなにこげがこちよい。

すべすべの毛皮をなでるだけで、ぞくぞくとした快感がつたわってくる。

ふたりはおれに背中をなでられ、くくく……、とのけぞった。

教室にいた少女の大半は犬、猫、ハムスターの遺伝子をもっていた。さっきのウサギの遺伝子を持った女の子はひとりだけだった。教室の中に少女たちからたちこめる、甘い香りが充満していた。けっして不快なおいではないが、吸い込むと頭の中がぼうつとなるような感じだ。おそらくナナのようなフェロモンが含まれているのだろう。

彼女たちの手が動き、おれの着ているシャツやズボンを脱がしはじめる。ちろちろと唇をピンクの舌がせわしなく舐めている。

ほどなくおれは少女たちによってすっかり脱がされてしまった。

体温

ああ……

少女たちはうつとりとした表情になり、おれのむきだしの肌に熱い肌を重ねてきた。彼女たちの肌はしっとりとして、すべすべしていた。

くずれおちるようにおれは床にすわりこんだ。おれのまわりに少女たちがどつとばかりに身をなげてくる。白い肌、小麦色の肌、さまざまな肌の色をしている彼女たちの肌はあせでぬれぬれと光っている。

「キスして……」

リンが顔をあおむけ、唇をよせてきた。前歯がすこし見えてそれが可愛い。

おれは彼女の唇に唇をかさねてやった。

すぐにリンは舌をからめてくる。

彼女の肌は燃えるようだった。

ケイはおれの首に腕をまわしだきついてきた。ケイの腕からわき腹にかけひろがるマントのような皮膚がぺたりとはりついた。ふたりはこぶりだが、弾力のある胸をぐいぐいと押しつけてきた。そのまわりで、教室の少女たちがおれを中心にして身をよこたえている。

ひとりの少女がずると這いよると勃起しているおれのペニスに顔をちかよせた。にやりと笑うと、舌をだしてぺろりと舐める。おれがなにも言わないと、さらに首をのばし口のなかにすっぽりとくわえた。

ちゅばちゅばと音を立て吸いはじめた。

目を閉じ、うっとりとしている。

まわりの少女はおれに肌をすりつけ身をよじっていた。

熱い。

彼女たちの熱でおれはだらだと汗をながしていた。おれはぐったりと身体をあおむけ、天井を見上げた。おれの手足に少女たちがまといつき、あらゆるところを舐めた。

両足の指をふたりの少女が口に含み、ちゅうちゅうと吸っていた。指の股に舌をからめ、一本ずつ丁寧に舐めていた。

少女がひとり、おれの顔のうえにまたがった。

「舐めて！」

さけぶと、じぶんでじぶんのものを両手でひろげる。

まだ未成熟なそこが、おれの目の前にひろがっている。

つるりとした割れ目をかざる襞は単純で、まだびらびらとしたかたちにはなっていない。懸命に彼女がおしひらいてやっとちいさなクリトリスがのぞいている。おれは舌先をのばしてその突起を刺激してやった。

あつ、と少女はあえぎ、さらにおれの口に割れ目をおしつけてくる。

おれはあんぐりと口をあけ、それを口いっぱいにつけいれてやった。

舌を動かし、割れ目の上から下まで勢いよく吸い上げ、舐めあげてやる。

ひいひいひいっ！

おれの口の上にまたがった少女は、腰をうかしつつ悲鳴のような声をあげた。

べつの子がおれの肉棒にほお擦りをしてうっとりとなつてゐる。彼女ののどからごろごろという音が聞こえている。猫の遺伝子をもっているのだらう。彼女は舌をつかつて丹念に舐めはじめた。

舌がざりざりしている。

亀頭を舐めあげると、その感触が適当な刺激になつて心地よかった。

ほほほ……

おれはおもわず声をもらしていた。

出る寸前、リンが少女をおしのけ、おれのうえにまたがり、股間に挿入した。

ずぶずぶとおれの肉棒が彼女の割れ目につきささる。小柄なせいかもしれないが、彼女のそこはおれのものを締め付けるようにうけいれてくれた。

ひいーつとリンはさけぶと、最初はゆっくりと、そして小刻みに腰を上下にゆらしはじめた。

あつ、あつ、あつと細い声が彼女の喉からもれていく。

おれのものを受け入れたそこからは大量の愛液がしたたっていた。

おれは蕩けそうになっていた。

彼女のなかは熱く、そしてたつぷりと濡れている。

だいたいメイドたちの基礎体温は高い。

おれたち人間が三十六度前後とすれば、彼女たちは二、三度高いようだ。それが興奮するとさらに高くなるのだから、ふれると燃えるように熱い。だからおれのものを咥えているメイのそこは坩堝のように熱くなっていた。

あ、あ、あ、あ、あっ！

コマ送りのようにメイの動きははやまり、髪の毛がわさわさとうるがった。胸のこぶりなふくらみはぶるぶると小刻みにゆれた。肌からは大量に汗がしたたり、あたりに小雨のようにちっっていた。

あうーっ！

ついにリンは達したのか、動きをとめ天を仰ぐ。唇からピンクの舌先がちらちらとのぞき、全身は汗でびっしりとなっていた。

ぐたり、とリンは倒れかかった。

その拍子におれのものが彼女からぬけ、先端から白い液体をどつとばかりに放出させた。少女たちがわつとそれにむらがり、あたりにちらばった液をなめとっている。

興奮した少女はじぶんでじぶんのものを慰め、おのおのあえいでいる。

まだ未発達な身体が興奮でピンクにそまり、われめからは大量の愛液があふれていた。

カレンダー

かつては用務員のための部屋だったのだろうが、いまはサンドラのための自室兼教員室となっているちいさな部屋におれは通された。彼女はおれのために麦茶を用意してくれた。よく冷えているそれをありがたく頂く。

のどがからからになっていた。

のどを潤しながら部屋をながめた。

サンドラの部屋は和風で、ゆかには畳がしかれ、ふとい柱は黒光りしている。彼女は卓袱台をおいて、そこにきちんと正座していた。どう見ても日本人とは思えない彼女の顔立ちと、黒いメイド服がこの部屋とは異質である。しかし彼女はここの暮らしに完全に満足していて、おれを見つめる顔もおだやかな温顔を見せていた。

「みんないい娘ですわよ。あの娘たちが日本に向かう日が楽しみですよ」

サンドラはおれにそう言うと、にっこりと笑った。

「船はいつくるんです」

おれの質問に、サンドラは壁のカレンダーを見上げた。

「そうですね……この前の寄航があの日だから……あと二週間というところね」

あと二週間！

おれはそのあいだに態度をきめなければならないのか。

おれはサンドラに諸尾博士のことを話した。

「ええ、わかっております。娘たちからあの人がいぶ悪いことは

聞いておりますし、年も年ですから覚悟しておりました」

そう言つと彼女は膝のうえにおいた手に目をおとした。

見舞いにいけないのか、と聞くとサンドラは首をふった。

「いいえ、それよりちいさな娘たちの教育がさきですわ。それにわたしが行つてもなんの役にもたちませんし、看護はメイドたちがよくこころえております」

そうですか、とおれはこたえて立ち上がった。サンドラはおれをじつと見上げ、さいごにこう言つた。

「お願いです。あのひとの頼みをかなえてくださいまし」

おれは考えておくところたえた。

ほかにどう言える？

滝

おれは島のまわりをまわっていた。

周囲三キロというから、一時間もあればまわれそうである。おれはこのさい、島のなかを徹底的に知っておきたいと思っていた。

あの滝はあやしい。

おれはそう考えていた。

なぜって、なにしろこんなちっぽけな島に滝が流れているなんてどう考えてもおかしい。だいいち、水源はどうなっている？ あんな滝を成立させるためには巨大な水源が必要だし、この島にはそんなものはあるわけなかった。

島の中央部をめざす。

道は終始上り坂で、獣道は途中とぎれとぎれで歩くのに難渋していた。

めざしているのは滝の裏側だ。

島の中央部の山は標高が百メートルもないが、なにしろちいさな島だ。たったひとつの山とはいえ、急角度で盛り上がっている。

おれは木にしがみつき、蔦をつかんで身体をおしあげた。植生はあいかわらず熱帯性の樹林で、羊歯がしたばえを構成し、木々には蔦がへばりついていた。むせかえるような草のにおいがたちこめている。密生した葉のすきまから日差しがさしこんでいる。

どうどうどうと滝音が聞こえてくる。

音をたよりに身体を押し上げていくと、おれは川瀬にでていた。ほとばしる水しぶきがきらきらと日差しを反射している。そのさきは滝になっていて、空中にしろい水のカーテンをつくっていた。おれは滝にきていたのだ。

川をさかのぼることにする。

水源はどうなっているのか？

ごつごつとした岩場をおれは歩いていった。あちこちに巨大な岩がつきだし、そのすきまを大量の水が流れている。

百メートルも歩くと、川は山の頂上ちかくにぽつかりとあいた洞窟から流れていることに気づく。

あやしい。

まるで水源を隠すためにあるかのようだ。

洞窟は身がかめなければはいれなかった。中腰になり、はいっていく。あしもとは流れる水で、腰までたっした川をおれはざばざばと水をかきわけ進んでいった。

ちよつとはいったただけであたりは真っ暗になってしまった。

ポケットからライターを取り出し、点火する。

ゆらめく炎のなかに、洞窟の内部がうかびあがる。

奥深く続いているようだ。

かまわず歩いていくと、ふいにひらけた場所に出る。いままでかがんでいたのを、ようやく腰をのぼせるようになり、おれはぼきぼきいう背中をまっすぐにさせてうめいた。

そこは乾いた石の床になっていて、まんなかにはざあざあと水音をたてる噴水になっていた。水流はその噴水から湧き上がっているようである。

指先が熱くなり、おれはライターを取り落とした。いつのまにか焼けるように熱をもっていたのだ。ライターは水面に落ちてじゅつと音をたてた。

ライターの炎がなくなるとあたりはあかるい。

見上げると天井のあたりに明り取りの天窓があり、ひかりはそこからなたれているようだった。

「どなたです」

いきなり声をかけられ、おれは飛び上がった。

洞窟の壁に横穴があいており、声はそっちから聞こえてくるようだった。

「そう言うあんたはだれだ？」

「男の方ですね。珍しい。ここには島のものはほとんど来ません。なんのために来たのですか？」

「滝だよ。こんなちいさな島に、あんなりっぱな滝があるなんてどう考えても変だ。それで確かめにきたんだ。どうやらあの滝は作り物らしいね」

くくく……、と含み笑いが響く。

「好奇心がおありのようね。もつともそれが男の人のいいところかもしれない。あの滝が作り物かもしれないと、この島のだれも考えないでしょう」

声だけの存在におれはいらいらしていた。

「姿を見せろよ。きみも諸尾博士の生み出したひとりか？」

「そうです。わたしは諸尾博士によって作り出された召し使いです。この滝をまもるのがわたしの役目。わたしの姿を見たいですか？ かなり驚かれると思いますが」

おれは肩をすくめた。

この島に来てびつくりすることはもう飽きている。

「かまわないよ、どうせきみもなにかの動物の遺伝子をもっているだろう?」

「はい。その通りです。わたしたちのことをそれだけ知っているなら、かまわないかもしれませんね。では、そちらへまいります」

穴の奥からずるり、べたりというなにかをひきずるような音が聞こえてきた。

ふっ、と女の顔が穴の奥に浮かび上がった。上からの光りに照らされ、顔だけしか見えない。さらに女は前に出る。上半身の一部、胸のふくらみが浮かびあがる。

そして彼女は全身をさらした。

おれは絶叫した。

うろこ

「しっかりしてください！ ごめんなさい、やはり姿をあらわすんではなかったわ……、ああ、どうしたらいいの——」

女の声におれは目をさました。

頭は女の膝にのせられている。

彼女は心配そうな顔でおれをのぞきこんでいた。おれと目が合うと、ほっとしたような表情になった。

「どうなっただんだ？」

「気絶なさったんですわ。わたしの姿を見て……」

おれはまじまじと女の顔を見た。

ほっそりとした顎の、卵形の顔。目は萱の茎を切ったような切れ長で、黒目がちである。唇はまるで紅をさしたように赤く、肌は漂白したように白い。髪の毛はまっすぐで、真ん中からわけてたれている。

彼女の胸のまるいふくらみがあらわになって、おれの顔のうえにつきだしていた。

おれは身を起こした。

ようやくゆっくりと彼女を見られるようになった。

おれに見つめられ、彼女は恥じ入ったようにうつむいた。

「きみは……」

「はい、わたしは蛇女です」

彼女の言うとおりだった。

上半身の、腰のあたりまでは彼女は人間そっくりだったが、下半身の足があるあたりから変化している。

なんとそこからはうろこがびっしりと生え、蛇の尾のようになっ

ていた。その姿におれは気絶してしまったのである。

おれは彼女のまわりを歩いてじっくりと観察した。

人間とおなじような上半身の、背中側にもうろこが生えている。それは肩甲骨あたりまで生えていて、うなじあたりで消えていた。女には両手がなかった。肩のあたりからなだらかに胴に続き、それがいつそう蛇のように見せていた。

それよりおれは彼女の股間にあたる場所に目をひきつけられていた。

むろん、蛇の身体をもっているわけだから二本のふとももはなく、ぺったりとした蛇の腹になっている。しかしよく見ると真ん中にかすかな割れ目の線が見えた。

「それはもしかして……？」

指さし、問いかけると彼女はうなずいた。

「はい、女性器です」

「どうやって使うんだ？」

「こうします」

蛇女はくつとちからをこめた。

するとその割れ目がいきなり開いた。

ぬめぬめとした光沢をたたえた性器があらわになった。

おれを見上げる彼女の目がだしぬけに淫蕩なものになった。

冷たいといっていいほどの美貌の彼女がそんな目をするときぐりとするほど色づぼかった。

おれはあわてて目をそらした。

「俺はどうなってるんだ。案内してくれ」

「わかりました、ではこちらへ……」

蛇女はおれを横穴へ案内した。

寢床

横穴もかすかに明るかった。

壁を見ると、ほのかに光っている。

ためしに指でさわると、ぬるぬるするものがついてきた。指先が燐光をはなっている。発光苔らしい。

おれの耳になにか機械の音が聞こえてきた。モーターの音のようだ。

穴の奥はくだり階段になっている。蛇女がずるずると尾を引きずっていくあとをおれは追いかけた。

そこには旧式の電気モーターがすえつけられていた。モーターはどうやら湧水ポンプを動かしているようだ。

「このポンプで地下水を汲み上げています。汲み上げられた地下水は滝になり、滝つぼの水はふたたび地下水となって循環してポンプにもどります」

「なんでそんなことするんだ。わざわざ滝をつくって流す目的は？」

「この島の自然をまもるためです。あの滝があるおかげで、島の地下水は全体にゆきわたり、ジャングルをたもっています。もともとはこの島にはほとんど雨がふりませんから、そうでもないとむきだしの岩山に戻ってしまうでしょう。あなたは滝の裏側にいきましたか？」

「ああ、ものすごいでっかい女と会ったよ」

「彼女の発案なのです。彼女は諸尾博士に交渉して、ここに滝をつくるよう施設を設けました。おかげで島にはたくさんの緑が生えるようになりました。わたしたちは博士に見放された種族ですから、なんとかじぶんたちだけで生きるすべを探さなければなりません」

「見捨てられたって？」

「そうです。あなたはわたしを最初見て驚きのあまり気を失いましたね」

彼女はおれを責めているのではないが、その言葉におれは顔を赤くした。女の姿を見て気を失うなんてはじめてだ。

「わたしは蛇女。あの巨大女ももとは鯨……ほかにも博士の気まぐれで、どう考えても男の人に好まれないような動物の遺伝子をもった女たちがこの島にはいます。彼女たちは失敗作として、博士から忘れ去られました。しかしいまでも生きて、この島に暮らしています」

そんなにいるのか。

「本当かい？」

「ええ、博士は理想の女性をつくる過程でいろいろ試しました。わたしもそのうちのひとつです。でもこんな姿では……」

ふっ、と苦笑した。

「どんな男のかたでも逃げ出しますわ」

おれは首をふった。

「そんなことないよ、きみは魅力的だ」

蛇女ははつと顔をあげた。

「嘘！　だってあなたは気絶なさったではないですか」

「いやあ、だしぬけだったからね。びつくりしたけど、でもよく見るときみもなかなかそるものがあるよ」

おれの言葉に嘘はなかった。

たしかにある意味グロテスクではあるが、反対に彼女の姿は色っぽい。ぬめぬめとした白い肌に、うるこはおなじ肌色だ。まるで巨大な白蛇のようだ。両腕はないが、上半身は人間そっくりでその胸はまるく、はりがある。おれはそつと蛇女の肌にふれた。

ひやりと冷たいのではないかと思ったが、ほのかに暖かい。姿かたちは爬虫類から借りているが、身体の仕組みは哺乳類のようだ。肌はしっとりとして、すいつくようだ。

ああ……

おれの手が触れ、彼女はうつとりと目を閉じ顔をあおむけた。おれはさらに手のひらをうごかし、その胸にのばした。ほっそりとした胴に、そこだけまるいふくらみがつきだしている。ふくらみは弾力があり、おれの手を撥ねかえすようだ。

ふ……、と蛇女は息をはいた。

唇から舌先がちよろちよろと見えている。

舌先は蛇のように割れていた。こんなところは蛇そのものだった。彼女は身をおこし、おれの真正面に顔をもってきた。じっと見つめてくる。

おれは彼女の唇をうばった。

ぬるり、と蛇女の舌がおれの口の中へすべりこんだ。彼女の舌はほそく、先が割れてふたまたになっでいて、おれの口の中でぐねぐねと踊っていた。何度も舌先を出し入れし、おれの舌をねぶつてくる。その感触は独特で、おれは陶然となっていた。おれは蛇女の胴体をぎゅっと抱きしめてやった。たちまち彼女の肌が燃えるように熱くなった。肌に汗がうかび、じっとりと湿ってくる。

「この奥に、あたしの寝床があるの……そっちで、ね？」

蛇女はそう言うと、その長大な胴体でおれの身体をぐるぐるまきにした。そのままふわりと持ち上げると、床をずるずると這っている。彼女の温かな胴体がおれの身体にまきついていてる。

寢床というのには豪華な室内だった。

岩をくりぬいたその部屋は、ちよつとしたひろさがあり、壁面はすべすべに磨き上げたてられ、まんやかに円形のベッドがあった。ベッドには天蓋があり、うすい絹のカーテンがさがっている。室内の温度はややひやりとしていて、外の暑熱とくらべると天と地ほどこちがっていた。もっともこの部屋は文字通り地の底にあるのだが。

ベッドの周囲にはさまざまな家具がならび、まるで王侯貴族の部屋のようなのである。天井からは電灯をつかったシャンデリアが下がり、あたたかな光りをなげかけている。応接セットも備えられ、テーブルにはこの島でとれるであろう果物が盛り付けられていた。蛇女の説明によると、彼女の口にできるのはこの果物だけだそうだ。彼女の消化器官は単純な構造で、肉や魚などの食物は消化できないのだそうだ。

彼女はおれを胴で抱きかかえたまま、ベッドにそつと横たえてくれた。

おれは彼女を見ながらゆっくりと身につけていたものを脱ぎはじめた。

愛液

蛇女に手はないので、おれの服を脱がすことはできない。
おれが服を脱ぎはじめると、その目に熱意があらわれた。

しゅーっ、しゅーっ と口から息が漏れている。興奮しているのだ。
ぺろぺろ、ぺろぺろ…… と彼女の唇からふたまたにわれた舌先が
ちよろちよろとのぞいている。

するり、と蛇女はベッドにのぼってきた。

するすると尾がまきとられ、ベッドを円形にとりかこむ。蛇女は
おれの肌にじぶんの肌をすりつけていた。彼女の肌は人間の女とま
ったくかわりなかった。すべすべとしていて、なめらかだった。ほ
のかに暖かく、しっとり汗で湿っている。おれは両手両足をつか
って彼女に抱きついた。

かぶり、とその胸に口をおしあてる。

まるい、ボールを半分に割ったような乳房と先端の乳首に吸い付
く。

ちゅうちゅうと音を立てて吸い付くと、蛇女はああ…… とため息
をついて口をあけた。真っ赤な口蓋に、するどい牙がのぞく。かつ、
と彼女は口を大きく開いた。彼女の顎は蛇とおなじく関節がはずせ
るらしく、信じられないほどおおきく開いた。

おれは無我夢中で彼女の全身を舐めていた。汗はほとんど味がな
く、かすかに甘みがあるようだった。果物をおもな食事に行っている
ことに関係あるのか。

白い、磁器のような肌が興奮でピンクにそまる。それまで見えな
かった血管が皮膚を透けて浮かび上がった。

しゅーっ、しゅーっ と蛇女は興奮でするどい息をはいている。歯

を食いしばった唇のすきまから息をもらしている。ときおりふたまたにわたした舌先がぴろぴろとのぞいた。

ぐつと背をそらすと、彼女はおれにその性器を見せつけた。

「お願い……」

ささやくように懇願する。

彼女の平たい腹部に割れた陰部は、ひくひくと蠢いていた。

おれはペニスを片手でつかむと、その割れ目に押し当てた。

割れ目にはとろとろと大量の愛液がにじみだしている。おれの亀頭はその愛液につつまれ、抵抗なくするりと挿入された。

はあああつ！

蛇女の全身が歓喜にひくひくと震えていた。尾の先端がばたん、ばたと岩の床を叩いている。

くるくると彼女の尾がおれの身体にまきついてきた。

うろこがあるにかかわらず、まったく不快な感触はなかった。すべすべとしていて、ビロードのようだった。

おれは腰を動かしていた。

にちゃ、にちゃ、にちゃと彼女のそこは大量の液につつまれ、おれの腰の動きに応じて淫猥な音をたてている。

だらだらと蛇女の全身から汗がしたたった。あたりに甘い香りがただよってくる。おれは夢中になって腰の動きをはやめた。

にゅるん……

蛇の胴体がおれの身体にまとわりつく。汗でぬるぬるになった彼女の肌が、おれの全身をはいまわり、愛撫していた。いつしかおれは滝の裏側の、あの巨大女の秘部に身体をずっぽりとうめた経験を思い出していた。あのときはあやうく死ぬところだったが、これは

違った。蛇女はあくまでもおれの身体をやさしく抱きしめている。

ぴたぴたぴた……

結合したところから、愛液が大量にあふれていた。蛇女の肌からながれる汗はまるで滝のようだ。

おれもまた全身に汗をかいていた。

ぼたぼたとこめかみから顎へと汗がふきでて落ちていく。

ふたりの汗でベッドのシーツはじっとりと湿っていた。

部屋の空気もまた熱っぽく、湿っていた。

蛇女の肌からほかほかと湯気がたちのぼる。それくらい彼女は火照っていたのだ。

ほおおおっ！

蛇女はぐつと背をそらせ、ぴんと尾が突っ立った。先端はぴくぴくと震えている。おれは思い切り放出してた。

がくり、と蛇女はうなだれ、ベッドに横倒しになってしまう。はうっ、はうっと何度も息をしている。

おれもまたぼうぜんとなっていた。

いきがかりとはいえ、蛇女とセックスするなんてわれながら驚くべきことだ。

ぼんやりとして息をあらげている蛇女を見ていた。

やがて彼女は薄目をあけ、こちらを見た。

「ありがとう……嬉しかった……」

こちらこそ、とおれはかえした。

それにしてもこんなところでずっとひとりでいてさびしくはないのだろうか？

おれがそう言うと、彼女は首をふった。

「あたしがこんな身体でしょう。島の娘とはあまり合わなくて、彼女たちはあたしを見るとわけもなく怖がるし。ひとりでもじぶんを慰められるのよ」

どうやって、と聞くと彼女はにやりと笑った。

彼女の尾の先端がするすると持ち上がり、じぶんの割れ目に差し込まれる。そして盛大にスラストをはじめた。

「こ……これで……慰める……ことが、でき……るの……！」

おれに見られているということで、彼女はいつそう興奮しているようだった。ひとりでじぶんを慰める彼女は、目をつぶってのけぞっていた。

おれは服を身につけ、立ち上がった。

「また来てくれる？」

彼女はおれを見上げた。

さあ、とおれは首をふった。

あ、あ、あ、あと蛇女はふたたび絶頂にたっして声をかぎりに絶叫していた。

おれは洞窟から外へ出た。
すでに夕方になっていた。

岩棚

「ずいぶんいろんなところを見てまわっているみたいね」

ナナが岩棚に身を横たえ、かるくのびをしておれを見た。

滝つぼ近くの岩場におれはきていた。

おれはナナと島のことについて話し込んでいた。

さいきん、おれはナナと会うことが多くなってきた。彼女は博士にさからい、勝手にジャングルで暮らしはじめているというだけあって、独自の思考を持っているようだ。そのせいで彼女との会話は刺激があり、おれの退屈をなくさめてくれる。

「まあな、こんな島はどこにもないからな。興味津々さ」

ふうん、とナナは目をほそめ首すじをかるくかく。ごろごろと喉が鳴っていた。おれは手をのばし、彼女の耳の後ろをかるくかいてやった。ナナは満足そうに目を閉じ、おれの手にはお擦りをしている。こんなところはまるで飼い猫そのものである。

岩場は高台にあつて、はるか水平線が望める。

島の周囲の海原に目をやっていると、はるかかなたに白く波がたたった。

なんだろうと見てみると、波頭をけたてて女の上半身が出てきた。あの滝の裏側に住んでいる巨大女である。彼女はざーん、と波をかきわけ身を海面にたたきつけていた。

「なにをしているのかな」

「身体につく寄生虫をおとしているんだって。もとは鯨でしょう。ああやるとふるい皮膚もおちて、気持ちがいいのよ。もつとも人目につかないときにしかやらないけどね。ここは貨物船の航路から外れているからああやって姿を見せることができるけど、いつもは洞

窟の裏にかくれているの」

そうか、とおれはごろりと岩にあおむけになった。ナナは膝をずらしておれの頭にさしこみ、膝枕をしてくれる。彼女のよく発達した太ももが気持ちよかった。青空をバックにナナはおれの顔を見下ろし、笑顔を見せた。ナナの胸のふくらみがほこらしげに突き出している。おれは無意識に彼女の乳首をいじりながら話しかけた。

「なあ、この島にはいったいどのくらい博士が作り出した生き物がいるんだ？」

「どうしてそんなこと気になるの？」

おれは蛇女と出会ったことを話した。おれの話しに、彼女は驚いたようだった。おれは彼女の乳首から手を離れた。

「蛇女のこととは知っているわ。でもあなたが会ったなんて……勇気があるのね」

「どうしてだい。あの女がそんなに怖いのかい？」

おれの言葉にナナはぞくつと身を震わせた。

「怖いわよ。あたしたち、どうしても蛇を見ると逃げ出したくなっちゃう……そりゃ、あの蛇女は博士のつくった、あたしたちと姉妹と違っていい間柄だけど、本能なのね。あの女を目にすると、どうしようもなくなっちゃうのよ」

「なるほどな。あの蛇女は博士がほかにいろいろな動物の遺伝子で女の子をつくったと言っていた。いったい諸尾博士はどのくらいの数の娘を創造したんだろう」

ナナはおれの顔をのぞきこんで首をふった。

「そんなの考えたこともないわ。ジャングルにはあたしの知らない場所もあるし、なにしろ博士は数十年前からこの島にいるんですもの。その間、いろんな実験をしているでしょうから、大変な数になるかもね」

ねえ、とナナは身をよじった。

彼女の身体から甘い強烈なおいが漂ってくる。

フェロモンだ。

おれの意味とは関係なく、股間が熱くなるのを感じた。

「そんなことより、楽しみましょうよ……、いいでしょう？」

「いいも悪いも、お前フェロモンを使っているじゃないか……」

「しょうがないじゃない。したくなると、勝手に出るんだもん！」

おれのペニスはズボンのなかで服地を突き破りそうになっていた。充血し、勃起したそれは窮屈ないまの状態を抗議している。ナナはおれのズボンの前を開き、なかから引っぱり出した。目を輝かせ、顔を近づける。

ざらり、としたナナの舌がおれの亀頭を舐め上げた。

びくん、とおれは反応していた。

彼女の舌の感触は強烈だった。

おれの反応をひきだしたことにより、ナナは満足したようだった。すっぱりと口の中にふくみ、唾液をまといつかせゆっくりと顔を上下させる。彼女の唇からおれの赤黒くなったそれが見え隠れしていた。

日差しがまぶしい。

おれは腕をかざし、目をおおった。

ナナの動きがはやまった。

熱い快感がかたまりとなって背筋から股間へはしっていく。ついに放出する。

ナナの唇から白い液体があふれた。

彼女はそれをぺろぺろと舐めとり、いとしげにほお擦りする。身体を押し上げ、おれのうえに跨った。

手をそえ、彼女はじぶんの股間におれのものをみちびく。

――！

ナナは目を閉じた。

ずぶりとおれのものがナナの割れ目に突き刺さる。根もとまで突き刺さったそれを、ナナは腰をうかしつつ上下に差し入れする。彼女は忘我の表情になり、腰を上下させた。

ぴちゃぴちゃぴちゃ……

ナナの割れ目から熱い愛液があふれた。

目を閉じ、唇を舌先で舐めている。

顔が上気し、全身の皮膚が汗でぬれていた。

「ああっ、ああっ……いいの……、いいの、とってもいいの……！」
うわごとのように繰り返すと、腰を動かし歯を食いしばる。じぶんでじぶんの胸のふくらみをつかみ、もみあげた。

おれもまた必死に耐えていた。

ナナのそこは熱く、ぎゅっとおれのものを絞り上げてきた。

おれは二度目をはなっていた。

あ、あ、あ……

ナナは小刻みに身体をふるわせ、顔をうつむけた。

ふうーっ、ふうーっとおおきく息をつく。

やがて身をはなし、満足そうにため息をついた。

ごろごろと彼女はのどをならしていた。

意地悪

おれたちは滝つぼで水をあびていた。

汗で体中がぬるぬるになって、流そうというわけだ。

滝つぼの水はふるえあがるほど冷たく、おれたちは唇をまっさおにさせてばしゃばしゃと水をかけあっていた。彼女はおれに水かけられ、きゃあきゃあと悲鳴のように笑いさざめいていた。

ナナはおれの首に腕をまわすと、熱くなつた肌をおしつけてきた。冷たい水のなかで彼女の燃えるような熱い肌が心地よい。

おれはナナの身体をしっかりと抱き寄せていた。

ふたりの肌のあいだにわずかに温かな水の層ができておれたちは身動きをしないようにしてそれをたもっていた。

ナナはおれの顔にじぶんの顔を近づけ、唇を押し付けた。

おれは彼女の唇をうばってやった。

夢中になってナナは舌をさし入れてくる。

ざらざらとした彼女の舌の感触。押しつけるナナの胸のふくらみがおれの胸を圧迫している。彼女は全身をつかつておれの皮膚を刺激していた。

おれは唇をはなし、にやりと笑うといきなり彼女の頭をつかみ、

水の中に押し込んだ。

「なにすんのよお！」

彼女は水中からおれの手からはなれ、必死になって浮き上がった。ぷはあ、と息をついて、きつとばかりに睨みつける。おれは足をのばして彼女の足をすくった。

わあ、と絶叫してナナはふたたびあおむけに水中にたおれこんだ。ばしゃばしゃと水をかきわけ、ふたたび立ち上がる。はあ、はあとおおきく息をつき顔をごしごしとあらった。

おれは口を開いた。

「きみ、またフェロモンを出そうとしたろう！ おあいにくさま、ここは水の中でお前のおいは水の中にちつて、おれにはきかないんだ」

まあ、とナナは口をまるくした。

おれは高笑いをして滝つぼから岩棚に這い上がった。すっかり冷えた身体に、日差しに温められた岩の表面が心地いい。おれの身体をぬらした水は表面にたちまちしみこみ、あつというまに蒸発していく。

なんだか気分がよかった。

ナナの欲望をかわしたことでじぶんに自信がわいたような気がする。

ぶすつ、とした顔でナナも岩棚に這い上がった。

おれのとなりに腰をおろし、膝をかかえる。

「意地悪！」

投げつけるような口調だった。

おれはにやにやと笑っていた。

しばらくおれたちはにらみ合っていた。

と、ナナはぷつとふきだした。

おれも笑いをこらえていた。

あはははは……

ふたりは岩棚のうえで腹をかかえて笑っていた。

おれは立ち上がった。

強烈な日差しで、すっかり身体はかわいている。

岩棚にひろげていた服を身につける。

ナナはおれを見上げた。

「どっかへいくの？」

おれはうなずいた。

「そうさ、島の中をほろつき歩くつもりさ」

ナナは肩をすくめた。

敵

やはり歩くとなると島はひろい。

周囲三キロ、長径一キロ半のやや南北にほそい楕円をしている島の北東部におれは来ていた。このへんは山の裏手にあり、斜面がえぐれてくぼ地のようになっている。博士の屋敷がある南東部にくらべると、やや空気はひんやりとしているようだ。しろい石灰岩の岸壁が垂直にちかい角度でたちあがり、ふもとには緑が一面にはえている。

おれはあてもなく歩いていった。

なんとなく、ここであらたな出会いがあるような予感があった。がさがさと葉擦れの音がして、ひとりの女の子がしげみから姿をあらわした。

おおあたりだ。

「だれなの？」

鋭い目つきで見つめてくる。

ほっそりとした鋭角的な顔の輪郭に、はっとするほどおおきな瞳をしている。耳はちいさく、頭のかたちにぴったりと貼り付いたようなかたちをしていた。身につけているのはナナとおなじような、胸と腰をわずかにおおう布切れだけだ。身体つきもほっそりとしていて、胸はあまりめだっていない。ながい手足が印象的だった。

「だれだと思う？」

おれは問い返した。

彼女はまじまじとおれを見つめた。

はっ、となにかに思い当たったようだった。

「もしかして……男の人？」

「あたり。おれは男だ」

まあ、と彼女は口をぽかんとあけた。

おずおずと近よつてくると、おれのまわりを円を描くように歩いてくる。両手をうしろにまわし、じろじろと見ている。

「ふうん……」

うなずく。

おれは彼女の尻を見ていた。

やはり尻尾だ。

尻の割れ目からちよこんとつきだした尻尾は、びくびくと動いていた。かたちからすれば鹿らしかった。

なるほど、小鹿のような少女という形容がある。彼女はまさしくそのことばがぴったりだ。目が大きく、やや浅黒い肌とほっそりとした手足。ちいさな顔に、ちいさな口がますますその印象をつよめている。

ふんふんふん、と彼女はおれの身体に鼻をすりつけにおいをかいだ。

彼女の顔がしかめられた。

「あんた、淹の娘たちのおいがするよ！」

「そりやしかたない。さつきまで一緒にいたからね」

さつ、と彼女はとびあがりおれから離れた。目がまじまじと見開かれ、あきらかな恐怖の表情をうかべている。

「あいつら、連れてきたの？」

いいや、とおれは首をふった。

彼女の反応は意外だった。

「どうした？ あの娘たちもきみとおなじ仲間なんじゃないのか」
ぶるぶるっ、と娘は首をふった。

「仲間なんかじゃない！ あいつら、敵よ」

「敵？」

小屋

タミと名乗った娘はおれを仲間のところへ連れて行った。

彼女たちは島の山懷のジャングルに村をつくっていた。木の枝を組んで、簡単な小屋をつくっている。小屋には葉をかぶせ、外からはわからないようカモフラージュをしていた。

タミが声をあげると、そろそろ彼女の仲間たちが姿を現す。村のまんなかには焚き火がたかれ、土器を焼いているところだった。まるで縄文時代の生活のようだった。

村の住民はおれを案内したタミに似て、ほっそりとして目がおおきい美少女たちばかりだった。おれの目にはほとんど見分けがつかなかった。どうやら同じ種類の少女たちが共同生活をしているらしい。彼女たちはジャングルに生えている植物の葉をつまみ、口にはこんでいた。もぐもぐと口を動かし、ひっきりなしに食べ続けた。草食動物の習性が強いらしい。

彼女たちはここで繁殖しているらしく、成長の段階もまちまちだった。

生まれたての赤ん坊から、どっしりと實禄のついた年長の女までさまざまの年令の段階の娘たちがそろっている。

ここにたどりつくまでおれはタミにさっきの言葉の意味を何度も尋ねたが、彼女は首を左右にふってあかそうとはしなかった。しかしナナにたいする恐怖はありありと感じとられた。

ちゃんちゃん、とおれの袖をつつく手がある。

ふりかえると、おれの目には五、六才くらいの少女がにっこりと笑みをうかべ、大きな目でこっちを見上げている。このくらいのおおきさなら、生まれてから一年未満くらいか。おれは膝をおろし、

彼女と目をおなじ高さにして話しかけた。

「なんだい？」

「おじさま、あたしとおまんこしませんか？」

えっ、とおれは驚きにのけぞった。

タミをふりかえると、彼女はにこにこしている。

「そうよねえ、ユミちゃんおまんこしたいんだよねえ」

うん、とユミと呼ばれた少女はうなずいた。

手を後ろ手にくみもじもじとしている。えへへ……と舌をだして笑っている。おれの股間がづきりとうずいた。

可愛い。

こんな少女を性の対象として見たことはなかったが、考えてみればここは日本ではなかった。なにをしてもつかまることはないのだ。

おれは口を開いた。

「ユミちゃん、おまんこってなにするか知っているの？」

「あのね、男の人のオチンチンと、女の人のおまんまんをくっつけるの。そしてね、男の人のオチンチンを舐めたりしゃぶったりすることなの」

ユミはうたうように暗唱していた。たぶん、ほかの女から教え込まれているのだろう。

おれの顔ににたりと笑いがうかぶ。

そうだ、なにが悪い。

挿入は無理だろうが、フェラチオくらいならできるはずだ。ここは日本じゃないのだ。

おれは彼女のちいさな手を握った。

「よし、おれとセックスしよう！」

ユミはこつくりとうなずいた。

「あたしも一緒にいくわ」

タミもそう宣言するとおれのもういっぽうの手を握ってくる。手のひらが熱い。

おれと彼女の目があう。

ぐつとタミは握りかえしてきた。

おれたち三人は小屋のひとつにはいった。

まわりにいたほかの仲間の女たちがうらやましそうな目つきで見送っている。タミは胸をはりほほを染めておれと一緒に小屋の入り口をくぐった。

失禁

入り口をくぐると、藁をしいたベッドがあった。

おれをまんなかに片側にユミ、片側にタミがねそべる。

ユミがおれのズボンの前をひらく。

勃起したおれのものを目にして、わあ……とちいさくさげぶ。

「おつきい……！」

おれをちよつと見上げ、うふと笑うと口をちかつけた。

小さな口がおれの亀頭をくわえる。

彼女の口はちいさすぎて全部をくわえることはできず、先端だけだ。おれを上目遣いに見て舌先をちよろちよると動かしている。おれと目があつてくく……とふくみわらいをしていた。

タミがおれの顔にじぶんの顔を近づけた。

唇がかさなる。

つるりと彼女の舌がおれの舌とからみあつた。たちまち彼女の肌が熱く燃えると、香水のようなかおりがただよつた。

そつといえばジャコウジカという鹿の種類がいたな。もしかしたら彼女たちにはその遺伝子がいっているのかもしれない。

ユミはおれのものをくわえ、ふうふうと息をついていた。彼女の鼻息がおれの股間にかかっている。どうしても口にくわえることができずべろべろと舌を全体にはわせている。

おれの肉棒は彼女の唾液ですっかり濡れていた。

おれは唇をはなすとタミにおれにまたがるよう指示した。ユミを差し招き、股間をおれの口にもつていかせる。

ユミはおれの顔の上で股をひらく。

まだ未成熟の股間があらわになつた。

色白の彼女のそこはつるりとなって、ぐいとばかりに押し開くと
充血のため赤く紅潮していた。

おれは口をその股間に押し当てた。
舌をはわせる。

おさない割れ目をさぐるとようやくクリトリスを舌先が見つけた。
ちよろちよるとこきざみに動かして刺激してやる。

ユミはおれの顔のうえでのけぞり、目をつぶった。たちまち顔が
真っ赤にそまる。

タミはおれの股間にまたがり、その割れ目を近づけていく。
ぐっとおれのものが彼女を貫いた。

きゅーん、というような声をタミはあげた。

彼女は腰をばげしく上下させている。服を脱ぎ捨てた彼女の裸は
ひきしまつて、全身に汗が噴き出していた。

あん、あん、あん、とユミはおれの口に股間を押し付け、顔を左
右にふっている。おさない快感に、全身がはてり白い肌がピンクに
そまっていた。

ふるふるとユミの腰がふれている。

おれの口のなかにあたたかなものがあふれた。

「あつ、あつ、あつ！ で、出ちゃう！」

ユミが悲鳴をあげ、おれから離れようともがいた。

おれはかまわず、彼女の尻をがっしりとつかんでいた。

「駄目よう！ 出ちゃってるよお！」

ユミはいいやと首をふった。

腰をうかす。

その股間からちよろちよると黄色い液体がほとばしっている。
失禁したのだ。

くすん、くすんとユミは涙をうかべていた。

「ごめんなさい……」

おれは彼女の髪の毛をなでた。

つやつやとした、やわらかな髪の毛。

「いいんだよ。そんなの」

はうう、とタミはため息をついた。

おれのものをひきぬき、はっはっど荒い息をついていた。

ユミを見る。

「あんた、やつちやっただの？ 男の人に」

ユミの股間からは小水が流れ続けた。彼女の小便は藁のベッドにしみこんでいる。

ぐすぐすとユミは鼻を鳴らした。

「うん、がまんできなかったの」

タミは舌打ちをした。

「もう、しょうがないわねえ。あたしがあんたにいいことしたときも、いつつも洩らしてばかりなんだから！」

「まあ、怒るなよ。おれ、怒ってないから」

おれはユミを抱きよせた。ユミはひつく、ひつくとしやくりあげながら、おれの胸に顔をうずめている。

タミはちよつとにらんだが、おれが怒ってないことを確認して機嫌をなおした。笑顔になり、おれのそばに近寄り腕をくむ。顔をちがづけ、ささやいた。

「ねえ、博士のとこなんかにいないであたしたちと暮らさない？」

あたしたちみんなであんたを歓迎するよ」

「そりゃ無理さ。だってあと二週間で船がくる。おれはそれに乗って日本に帰るんだ」

おれのこたえにタミがなにか言いかけたそのとき、遠くでなにかの声が聞こえてきた。

獲物

ううおおおお……

それはなにかの雄たけびというか、狼の吠え声のようだった。タミの顔がさっと緊張した。

「来た！」
ちいさくつぶやく。

目がいつぱいに見開かれ、顔は蒼白になっている。

「おい、なにが来たんだ？」

おれのことばなどまるで聞いてはいない。おれの胸でふるえているユミをひきはがすとじぶんの胸にかかえた。

さっとたちあがると、外へ駆け出す。

集落のまんなかでさけぶ。胸にはユミを抱きしめていた。

「逃げて、逃げなさい！」

きやあ、きやあと女たちがわめきつつ駆け回る。てんでんばらばらに逃げていた。

「おい、なにがどうなってるんだ？」

おれは小屋から出てさけんだ。

きつとタミはこつちを見た。

「あんたね……あんたが連れてきたんだ」
「なんのことだ？」

ぐつと齒をかみしめると、ユミをかかえたまま走り出していた。そのままジャングルへ飛び込んでいく。とーん、とーんと跳ねるような走り方で、彼女の尻尾の白いところがちらちら葉影に見えていた。

ただだっという足音にふりかえると、ナナを先頭に滝つぼでくらししている女たちが集団になって近づいてくるところだった。

ナナはおれに気づくと立ち止まった。

背後の女たちはまるでおれにかまう様子はなく、そのままジャングルへ飛び込んでいく。

ナナはおれを見つめていた。

「なんでこんなところにいるのよっ！」

彼女の叫び声は非難しているようだった。

「なんでって、きみこそどういうわけでここに来たんだ？」

おれの問いかけにナナはふっ、と息を吐いた。

「しかたないのよ……あたしたちも生きなければならぬもの」

ぎゃあ……という悲鳴がジャングルでこだました。

おれたちははっとなってそっちを見る。

おれが歩き出すと、ナナはさっとおれの前に立ちふさがった。

「いけないでっ！ あんたに見られたくないの！」

「どけよっ！」

おれは怒鳴った。

おれの剣幕にナナは横にのく。おれは押しのけるようにして歩き、悲鳴の聞こえた方向に急いだ。

そしておれは見た。

タミの死体を。

タミは喉笛を切り裂かれて倒れていた。

そのまわりに数人の女たちがいた。

滝つぼで暮らす女たちである。そのうちの二、三人はおれと寝た

ことがある。

彼女たちの口は血で真っ赤に染められていた。

そばにユミがわあわあと泣き叫んでいた。彼女の身体にも返り血がべつとりとついている。

そして……そして滝つぼの女たちはくちゃくちゃと口を動かしていた。

食べているのだ。

タミの死体を。

「あたしたちは肉食なの……たいていは魚とか、海岸でとれる貝なんかで暮らしているけど、どうしても肉が食べたくなるのよ。獲物を狩らないと、本能がおさえきれなくなるのね……それでここで……」

おれは怒鳴った。

「このユミも食うのか？　こんなちっちゃい子も襲うのか？」

ナナは首をふった。

「ううん。これはあたしたちの本能をしずめるための狩りだから、ひとりでじゅうぶん。儀礼的なものよ。そういつもいつも殺すわけじゃない。これがあるから、博士のところでも暮らすことができるかったの」

そのときになって、おれはようやくこみあげてくるものがあつた。

げええ……

おれは吐いていた。

自然の摂理

「だから言っただろう。あいつらは失敗作だと……どうにもあの野生は矯正できなかった。わしらのところで暮らしている犬や猫の遺伝子をもった娘はペット・フードで満足できているが、あいつらはどうやっても本能がまさっておる……」

おれは博士の病室にきていた。

薄暗い中、博士は身体のおちこちに栄養補給のチューブや、呼吸用のマスクをつけ、外気をさけるための透明なシートにおおわれてやっと生きている状態だった。

どうにも気持ちの整理がつかず、おれは看護の娘たちをおしのけ病室へ侵入していた。おれの報告に、諸尾博士はかすかにうなずいて見せた。

おれは病室の椅子にがつくりと腰をおろした。
そのときになってがたがたと震えがきていた。

「それじゃほつとくんですか？ あんな殺戮を見てみぬふりを？」
博士はベッドのなかで薄く笑った。

「どうすればいいのかね？ ナナたちをすべて殺せと？ 失敗作ではあるが、あれらもわしの娘たちだ。そんなことできん」

「しかしタミは……ユミはあんなにおさないのに……」

「自然の摂理だ。村でくらしている鹿の遺伝子をもった娘たちはほつておくとたいへんな数にふえてしまうだろう。ナナのような天敵がいるから間引きができるんだよ。あれらはあれでバランスがとれておる」

「そんな……」

博士を見る。

が、かれは寝息をたてていた。眠ってしまったらしい。このころ

博士はつねにうつらうつらとした状態で過ごしている。老人の苦痛をへらすための麻酔がそうさせているのだ。博士の背後にある心拍数を表示する機器のスクリーンの点滅が、かろうじて老人が生存していることをしらせている。

おれは立ち上がり、病室を出た。
ドアのところに看護の娘がいた。

犬の遺伝子を持つ、博士にいちばん忠実な娘である。なんでも犬の種類は秋田犬だということだ。
なるほど、忠実なはずだ。

「あの……博士はとても悪いのです。あまり無理をさせないよう
にしてください」

うん、わかったとうなずく。

娘はつぶらな黒い瞳と、犬の毛並みをおもわせる茶色の髪の毛をしていた。ややしかくい顔立ちの生真面目な表情をしている。

おれはかるく片手をあげ、その場をはなれた。

乳房

じぶんにあてがわれた部屋にもどるとメイが待っていた。
おれのベッドのそばに椅子をだし、すわりながら居眠りをしていた。

おれがドアを開けた音にはっ、とばかりに顔をあげる。

おれと目が合うとたちまちその顔に笑顔がうかぶ。立ち上がり、
おれの前へ近づいた。おれは彼女の胸をじっと見ていた。

巨大な、ふたつのふくらみ。

彼女の顔よりもおおきなおっぱい。

おれは彼女を抱きよせ、膝についてそのふくらみに顔をおしつけた。
た。

ふくよかなまるみがおれの顔をつつむ。ややミルクのようなす
かなにおいがおれの鼻を刺激した。

いまのおれには彼女のこのふくらみが救いのようだった。

おれはメイのメイド服を脱がしはじめた。

メイはまったくさからわず、じぶんから服を脱ぐのを手伝ってくれる。

やがて上着がすっかり脱がされ、上半身裸になる。

ぶるんとふたつのふくらみがゆれていた。

おれはその乳首をすった。

ああ……

メイはかすかに眉をよせ、天井をあおいで息をはいた。
彼女をベッドに押し倒す。

どさ、とメイはあおむけになり横たわる。
ふたつのふくらみがぶるんとゆれた。

おれはものも言わずに彼女にのしかかり、その乳房にむしゃぶりついた。

あたたかく、やわらかい。

頬をおしつけ、ところかまわずキスをあびせる。

くすくすとメイは忍び笑いをしていた。

ひととおりおれは彼女の胸を堪能してまじまじと見た。

「おい……」

「なあに？」

「お前のおっぱい……変だぞ」

えっ？ と、メイはじぶんの胸を見る。

「どこがなの？」

「乳首がよっつだ……」

メイの顔色がさつと変わり、じぶんでじぶんの胸をだきしめた。

ぐい、と乳房をもちあげたしたにおれは見た。

もうひと組のおっぱいを。

それはもともとの巨大な胸にくらべればたしかに小さかったが、それでもふつうの女の子くらいはある。巨大な乳房のしたにかくれてはいたが、たしかにちゃんとしたおっぱいがもうひと組あったのである。

世の中にはこういう女性がたまにいる。

副乳というやつで、もともと人間の先祖の動物が乳がふたつ以上あったのが、たまたま先祖がえりではんらいの乳房のしたにもうひと組、ほとんどめだたないくらいの乳首があらわれることがあるのだ。しかしメイのはちゃんとしたおっぱいがもうひと組あらわれていたのだ。最初のころさんざん、彼女の裸を見ているときはなかったはずだ。ということとは、この二、三日のあいだにあらわれたということだろう。

おれはしたのあたらしい乳首を刺激してみた。
あつ、とメイはちいさく声をあげる。

感じているらしい。おれはあたらしいふたつの乳房を手でもみあげてやった。メイはふうふうと息をついてじぶんでおおきいほうの乳房をもみあげた。

たちまちメイの白い肌がピンクにそまり、乳首がかたくとがる。メイのくちからたらたらと大量の唾液がこぼれ、ベッドを濡らした。さいきん、メイはよだれを出すようになっていた。ぐつ、とおれの手のひらをふたつの乳房が押し上げる。わつとおれはその感触におどろいて手を離れた。

ぶるん、あたらしい乳房がむっくりともちあがる。見る間におれの目の前でメイの下乳房が成長をはじめ、もとの乳房とおなじくらいに育っていく。

なんだこりや……

ぼうぜんとおれは目をみはっていた。

もおおおおっ！

メイがさけぶ。

「おいっ、どうなってるんだ！」

おれはメイの頭を両手でつかんだ。

ふたたび手に触れたものに、おれは愕然となっていた。おそろおそろ彼女の髪の毛をかきわけると、

そこにあつたのは……
ふたつの角つのだった。

先祖帰り

おれはよろよろと博士の病室をめざしていた。
じぶんの目で見たものが信じられなかった。

メイの頭にはえた角はどんどん成長し、ついには髪の毛から顔を
出していた。完全に牛の角といっていい。メイはじぶんでじぶんを
慰め、ベッドの上でもだえ狂っていた。

ピンクの舌が口からつきだし、盛んに唇をなめていた。その様子
はもはや牛そのものといってよかった。

なにがおきたんだろう？

諸尾博士なら知っているかもしれない。

しかし病室にはあの秋田犬の遺伝子を組み込まれた娘ががんばっ
ていた。

「駄目です。博士は眠っていらつしやいます。お疲れになりますか
ら、会わせるわけにはいきません！」

「しかしどうしても会わなきゃならないんだよ。わかってくれよ、
通してくれ！」

「駄目です！」

おれはかまわず彼女を押しつけて通ろうとした。

そのとたん、彼女はおれにむかってくるる……とひくくうな
っていた。

鼻筋にしわがより、食いしばった歯から犬歯がによつきりとのび
ていた。

よく見ると彼女の鼻の頭が黒ずんでいる。
その黒ずんだ鼻の頭がややしめっていた。

おれの見ている前によきつ、と彼女の耳がとがっていく。まるで犬の耳だ。

おれはあとずさった。

おれは悟っていた。

娘たちは先祖帰りしているのだ！

おれは屋敷をさまよっていた。

どこへいくあてもなく、ただ足のむくまま歩いている。

と、廊下のむこうからキイの姿が見えた。

「キイ！」

おれはさけんでいた。

彼女はおれに気づくとぱつと顔をかがやかせ、とことこと走ってきた。

と、途中からキイの走りは変わった。ぐつと頭をさげると両手を地面につき、四足の状態で走ってきたのである。

おれの目の前にとまるとはっ、はっ、はつと息をはいてみあげる。目にはいっぱいにおれにあえてうれしいと喜びの色をたたえている。彼女の尻尾はちぎれんばかりにふられていた。

「キイ……」

おれは彼女の両脇に腕をいれて抱き上げ、宙に差し上げた。

キイはおれにかかえあげられると喜びのああまりじたばたと手足を動かし、おれに顔を押しつけ、べろべろと舐めまわした。

「キイ、お前……」

おれの問いかけに彼女はくーん、と鼻をならして首をかしげた。

やはり彼女の耳もとがり、三角になっていた。

おれは彼女を床におろし、その手をとって歩き出した。彼女はすなおにおれの手をにぎり、歩き出す。ときどきおれの顔を見上げ、

おれがなにを考えているのだろうと覗き込む。もはや彼女は喋ることもなくなっていた。

おれとキイは厨房にきていた。

そこからなにか物音が聞こえてくる。

なんだろうとのぞくと、冷蔵庫のドアをあけ、首を突っ込んでいる娘がいた。

ヨウだった。

「ヨウ……なにしてんだ？」

おれが呼びかけると彼女はのっそりと首をまわしておれを見上げた。

くちからは大量の食料がはみ出している。野菜や、ハムのきれはしがぶらぶらとゆれてたれていた。ヨウはくっちゃくつちゃと咀嚼をつづけ、ぶひぶひと鼻をならした。

彼女の耳も豚そっくりに変化していた。

おれが一步ちかぶくと、彼女はおれに食料をとられると思ったのか、ぴぎいいいっ、とものすごい声でさげんだ。その瞬間、彼女の身につけていたメイド服がびりびりつと派手な音をたてて破れ、彼女はその場で全裸になっていた。その姿はすっかり豚そのもので、もはや人間としての形状はとどめていなかった。

おれはたじたとになり、あとずさった。

ヨウはもうおれに関心をなくし、ふたたび鼻面を冷蔵庫につっこんだ。盛大に冷蔵庫の食料を食い荒らしはじめる。

屋敷の中の娘は全員、先祖帰りをきたしていた。猫、犬、ヤギ、羊……さまざまな家畜の遺伝子を組み込まれたメイドたちはすべてそのもともとの姿に変わっていた。人間らしい形もたもっていたが、

耳や目元が人間とはいえなかった。

おれは屋敷から海岸へ歩き、ジャングルをめざした。キイの手をつかんでいた指先はすでに離れていた。彼女はおれが屋敷から離れていくと不安そうに見送っていた。

破滅

滝つぼへたどりつく。

がさがさとしたばえをかきわけなにかが目の前をよこぎった。すらりとした肢体にぶちの斑点がついている。

きつとおれを見つめた。

みゃああ……

そいつはおれをにらんで叫んだ。

ナナだった。

まるでジャガーそのものの姿をしていた。指先から爪がにゅつ、とのびていた。

一瞬、おたがいに緊張がはしったが、すぐに彼女は爪をひっこめた。

ぷい、と顔をそむけるとさつと葉陰に飛び込む。たちまち彼女の

姿はジャングルに溶け込み、見えなくなった。

「ナナーっ！」

おれは叫んだが、彼女は足をとめることなく素早く逃げていった。おれは滝つぼから内部へ足を踏み入れた。

あの海底からの反射光が洞窟を青く照らしている。

がばあ、と波をかきわけ、あの巨大女が顔をあらわした。

おれはたちすくんだ。

彼女もまた変貌をはたしていた。

彼女のとのつた顔立ちはのっぺりとなり、両目はぐつと両端に離れている。口元は大きく裂け、肌はやや黒ずんできていた。髪の毛はぬけおち、ほとんど丸坊主になっていた。

「あなただったのですね……よかった。まにあって……」

「なにがまにあったんだ？」

「わたしが知能をたもっていられる限界にまにあってよかった、という意味ですよ」

「あんたが？」

「そう、わたしはもうすぐいまの知能をたもっていらなくなるでしょう。やがて普通の鯨なみの知能になってしまいます。言葉もわすれ、海洋をただよっただけの存在になってしまうのです」

「なにがあつたんだ？　なぜ娘たちは先祖帰りをしているんだ？」

「あなたのせいです」

「おれが？」

「そうです。それしか考えられません」

おれはへたへたと尻をついていた。

「わからねえ……教えてくれよ」

「あなたはこの島にきていらい、たくさんの娘たちとセックスをしましたね」

「そりゃ……」

おれは愕然となっていた。

そうだ、それしか考えられない。

彼女はうなずいた。

「そう、それが原因なのです。知つての通り、諸尾博士はあのお年ですからとうに男性の機能はなくしておいででした。ですからわたしたちをつくりだしたとしても、それが人間の女のセックスとおなじものか、確認することはできなかった。それであなたがやってきたのをさいわい、娘たちをけしかけてセックスをするよう命令したのです。彼女たちはもともとそのためになされた存在です。嬉々としてあなたとセックスをしました」

おれは顔をおおった。

彼女の声は容赦なくつづいた。

「わたしたちは人工的な生き物です。博士の発明した遺伝子エッチングマシンで生み出された、作り物の命。そんなわたしたちが、安定的な生命とは思えません。あなたとのセックスにより本能が呼び起こされ、それが外見や知能にあらわれているのです」

彼女の言葉はしだいに不明瞭になっていく。その周波数はじょじょに低くなっていき、こもっていった。

「さようなら、もうお会いすることもないでしょう……博士の願いもお忘れください。男の人とのセックスは、わたしたちにとっては身の破滅だったのです……」

はっ、とおれは顔をあげた。

すでに彼女は顔を水中に沈めていた。

ぶくぶくと水面に沈むと、彼女は水中で身をひるがえし、海底でつながっている通路にもどっていく。身をひるがえす寸前、彼女の下半身が水面から水しぶきをたててあらわれた。

その下半身はすでにぴったりとつながり、足先はひれに変わっていた。

がばあ、と大量の水しぶきがまいあがり、ざああ……とおれの全身を濡らした。

だばーん、と彼女の下半身は水をたたき水中へもぐっていく。

両腕もまたひれのかたちに変わっていた。

彼女は水をかきわけ、消えていった。

炎

滝つぼへもどりあたりを見回す。

はじめて静寂が支配していることに気づく。そういえば、いつもここにいたナナの仲間がひとりもない。

どこへ行ったのか？

うおおおおおん……！

ジャングルのむこうから遠吠えが聞こえてきた。

はっ、とそちらに耳を澄ますとさらにその遠吠えにこたえる狼の咆哮が聞こえてくる。

ときどきときとおれの胸で心臓がなっている。

なんだかいやな予感がした。

おれは駆け出した。

声は屋敷の方向へむかっている。

こけつまろびつ、おれはジャングルのなかをつつきり屋敷へと駆けていった。

砂浜に出ると多数の足跡が刻まれている。

よく見ると足跡はすべて屋敷へむかっていた。

目をやると黒煙が上がっていた。

！

火事だ！

ぱちぱちと木材が燃えている音がして、つんときなくさいものの焦げるにおいがただよった。

おれは砂浜を駆けた。

ごおっ……

屋敷が見えるところまで来ると、オレンジ色の炎があたりを真っ赤にそめていた。

屋敷は燃えていた。

めらめらと燃え上がる炎が壁を、屋根瓦をなめている。ぱきん、と窓ガラスが熱で膨張し、割れる音がときどきまざる。

ばん、と屋敷のドアが蹴破られるように開き、なかから滝つぼにいた狼の遺伝子をもった娘が姿をあらわした。

身につけていたわずかな布切れはだらりとたれさがり、彼女の顔には精悍な笑みがうかんでいた。

はあーっとおおきく口をあける。

真っ赤な口蓋に、ぎらりとひかる牙がのぞいた。

目をらんらんと輝かせ、彼女はおれに飛びかかった。

ぐっとおれの首筋に彼女の手がまきつく。そのままぐいぐいと締め付けた。かあーっ、と彼女は大口をあけ、おれに噛み付いてきた！

と、ぴくんと彼女の動きがとまった。

はっとな彼女は顔をあげ、おれに噛み付いた口を離した。たちまちその目がおだやかなものにもどった。

「あんだ……」

苦労して彼女はそれだけを言葉にした。その言葉はひどくぎこちなく、声をだすことが難しいようだった。

くうーん、と鼻をならしうつむく。

くんくんとおれの身体をかきまわって、やがてその尻尾がぱたり、ぱたりとふられそしてちぎれんばかりにふられていった。

はっ、はっ、はっ、と彼女は全身でよろこびをあらわしていた。

おれは彼女から身を離し、屋敷へむかった。

あちこちから火の手があがっていた。

燃えていないところを選んで歩くと、目に付くいたるところにメイド服の死体ごろごろがっていた。みな首筋を噛み破られ、鮮血のなかに横たわっていた。

なんてことだ……

滝つぼの娘たちが襲ったのだろう。野生の血がそうさせたのだ。しかし野生の生き物ならこんな残虐な殺戮はしない。おそらく人間の部分がそうさせているのだ。

博士の病棟はまだ燃えていなかった。

通路を守っていたあの秋田犬娘は見えなかった。襲われたのか、それとも敵をむかいうつためこの場を離れたのか。

ドアを開けると薄暗い中、諸尾博士は横たわっていた。

諸尾博士の死

老人はおれがはいつてくると目を覚ました。

博士の様子はまるで生ける骸骨そのものだった。

「だいぶさわがしいようだな……」

「娘たちが野生をとりもどしました。ここはめちゃくちゃです。何人も殺されています」

おれがそういうと、博士はぽかんと口をあけた。

ぐつと歯をくいしばる。

「やはりこうなったか……」

おれは驚いた。

「それじゃ予想していたんですね！ おれとセックスを経験することと野生が目覚めることを？」

ぜいぜいぜいと博士はあえいだ。

「ごぼごぼとこみあげる痰をやつとのおもいで飲み込み、口をひらく。」

「ああ、こうなるかもしれんとは思っておった……しかし抑えられないはずだった……すくなくとも屋敷の娘たちは……しかし甘かった……わしの仕事はすべて失敗した！」

ぐぐつ、と博士のくちもとからなにかがこみあげた。

「ごぼり、と博士は赤黒い液体を吐き出した。シートが博士の吐いた汚物で汚れて、あたりに腐敗臭がただよった。おれはええきあげるのを必死に耐えていた。」

がはあ、がはあ……！

博士の身体がおおきく波立ち、背をえびのようにまるめせきこむ。おれはかれの背中をさすってやった。とりあえずそれくらいしかで

きることはなかった。

「ごろごろと博士ののどがなり、くるりと目玉がうらがえった。黄色く変色した白目をむき、博士の身体がぴん、と硬直した。

ふっ、と老人のちからがぬける。

すっ、とやせおとろえた身体がベッドにしみこんだ。

おれは博士の頸動脈に手をあててみた。

なにも感じない。博士の心臓は機能を停止していた。おれは博士の手首をとった。

離すとぼとりとちからなくなたれる。

博士は死亡していた。

ふらふらと部屋を出ると、あの秋田犬娘がたちはだかった。

彼女の身体にはあちこち傷ができ、着ているメイド服はぼろぼろに裂けていた。ぼたぼたとあしもとに血がたれている。

彼女はおれを見るとぐるぐる……、と歯をむきだしうなった。両目かららんとひかっている。

体中傷だらけにかかわらず、まんまとした闘志をたたえている。「待てよ！」

おれは片手をあげた。

きゅっうん……

彼女は小首をかしげ、おれを見上げた。敵ではないと判断したのだろうか？

「博士は死んだぜ」

おれの言葉にはっ、と彼女の目が見開かれた。

よた、と足もとがみだれた。
まだひとの言葉を理解することはできるらしい。さっ、と病室を
むく。

「行つてやれ」

彼女は部屋のなかへとびこんだ。

うおおおっ……ん……

部屋のなかからすさまじい遠吠えがひびいていた。

はっ、はっ、はっ……

おれは全力で駆けてきてあえいでいた。

目の前に学校の建物がある。

見たところ、あまり変化はないようだ。

よかった、まだここまできてはいないようだ……

土足のまま教室にふみこむ。

だれもない。

教室はしん、と静まり返っていた。

と、だれもないと思ったおれは教壇のふきんでだれかが倒れて
いるのに気づいた。

ちかよるとサンドラだった。

老婆の顔には恐怖の表情がうかび、ときれていた。首筋になに
かがまきついたような赤黒いあとがあった。だれかが、いやなにか
が彼女の首をしめ息の根を止めたのだ。

ずるる……

なにかを引きずるような音。

ふりかえると巨大な肌色の蛇の尾がちらりと見えた。

とびだすと、あの蛇女が廊下を這っているところだった。

「おい！　こんなところでなにしてる？」

くるりとふりかえった蛇女のくちもとを見ておれはぎよっとなった。

彼女のくちもとは真っ赤にそまっていた。

その胴体がいやにふくらんでいた。

おれはさどつていた。

彼女がなにかを、いや学校の娘のだれかを呑んだのだ。

あいつは言っていなかったか？

じぶんは果実食だと。

あれは嘘だったのか？

いや、たんに野生がよみがえったのだろう。果実食の蛇はいない。しゅうしゅうと彼女はくちもとから息をはきだし、ふたまたにわれた舌先がへらへらとひらめいていた。

ずるずると長大な胴体をひきずり、彼女はおれの目の前から姿を消していった。おれはただそれを見送るだけしかできなかった。

帰国

おれは棧橋で待ち続けた。

腹が減るとジャングルから果実をもいで口に運ぶ。

喉の渴きは川の水で癒した。

一月に一度、ここにたちよるといふ補給船を待ち続けたのだ。

ときどき島の娘たちがジャングルのなかからおれの姿をのぞいているのを感じていたが、おれはあいてにいなかった。もう、彼女たちの姿は完全にもとの生き物にちかいかたちに帰っていたのだ。

毎日の日差しはおれの肌をやき、日焼けした皮膚がめくれてまだらになった。

そして船がやってきた。

水平線の向こうからおおきくなる船影を見て、おれは信じられない思いでいた。いつしかおれは一生この島にとじこめられるんじゃないかと思っていたからだ。近づく補給船に、おれは気違いのように手をふっていた。

船はかなり旧式の、漁船を改造したようなつくりだった。甲板には補給物資らしい積荷がやまになっている。船首には荷おろしをするためらしい小型のクレーンがさがっている。

船員がもやい綱をなげてくるのを受け止めると、その船員は妙な顔になった。真つ黒な髭をのばした、アジア系の男だった。男はかたことの日本語で話しかけてきた。

「博士ドウシタ？ ナゼ女、コナイ？」

おれは首をふった。

「博士は死んだ。娘たちもここにはこない。もう、補給する必要もなくなった」

船員の目が驚きにまるくなった。

おれは頼み込んだ。

「たのむ、おれを乗せてくれ！ 日本に帰りたいんだ」
船員の背後からでつぷりと太った、船長らしい男が姿をあらわした。

ふたりのあいだで早口の現地語による会話がかわされた。おお……、と船長は博士の死をしらされ、おおげさなジェスチャーで驚きをしめした。船員がおれを指さし、なにか言った。船長はおれを船の上から見おろし、眉をよせた。

が、肩をすくめおれにあがってこいというしぐさをした。
おれは船に乗り込んだ。

船長はせっかくもってきた荷が無駄になったことでとまどっているようだった。船員を通訳にして、この荷をじぶんたちで処分していいものかどうか聞いてきた。おれは関心がなかったので勝手にすればよいとこたえた。おれのこたえに船長はにんまりと笑いをうかべた。売りさばくことによる利益がふところにくるがりこむことを想像しているのだろう。

船はとろとろとした速度で帰港の途についていた。
毎日風がつづき、航海は平穩そのものだった。

やがて一週間後、おれは東南アジアのある国の港にたどりついた。船長に礼をのべ、おれは上陸した。船長と船員はまんめんの笑みをうかべ、おれを見送った。これからあの荷を売りさばきにかかるのだろう。うまくいけばいいが、とおれは祈っていた。

タクシーを呼びとめ、日本の大使館に連れて行ってくれるように頼む。

数十分後、おれは大使館についていた。
出頭すると、大騒ぎが待っていた。

あの嵐で、おれひとりが行方不明のままだったのだ。ほかの乗員、乗客はひとりのこらず救助されていたのだが、おれの生死だけがわからなかったそうだ。それがひと月後にひょっこりあらわれたのだから、大変な騒ぎになった。

たちまちおれは日本からかけつけてきた記者たちにもみくちやにされていた。

おれはどんな質問にもこたえなかった。

いや、記憶喪失をよそおったのだ。

ええ、気がついたらあの町にきていました。そのあいだ、なにをしていたのか、どこにいたのかまったく記憶がありません。ほんとうになにも覚えていないんです。

とにかくそれで押し通した。

本当のことを言えばこんどこそ気違いあつかいされと思ったからだ。

おれは大使館員の援助で帰国した。

帰国した数日は毎日が大騒ぎだったが、十日もしないうちに世間はおれを忘れていた。

やがておれは両親の説得で大学入試の準備にとりかかった。ようやくおとずれた静かな日々、おれは経験したことをまとめることにした。

それがこの記録である。

いま読み返し、おれはあの島の出来事を思い返していた。

考えてみればあのメイドたちは真剣に男の世話をすることへ一生懸命だった。それがセックスの罠にああいうことになってしまった。博士は死に、研究の記録もすべて灰になってしまったろう。遺伝子エッチングマシンはどうなったろうか。あの炎だ。無事ではすまないにちがいない。

しかし……

あの少女たちはどこへいったのか？

サンドラが教えていたメイドの卵たちだ。

それにまだまだ島にはおれの知らない娘たちがいるにちがいない。もしかしたらもつと知能をもつ生き物……たとえば類人猿の遺伝子からつくりだされた娘たちが潜んでいるかもしれない。博士のことだ。そういった生き物から娘をつくりだす誘惑にはかてなかったのではないか？

そういったメイドたちが繁殖し、独自の知能を発達させることがないとは、だれにもいえないのではないか？

やがて彼女たちが島のなかで進化し、独力で島を脱出する方法を見つけたら……

島にはまだ博士が残した記録はどこかにあるかもしれない。それを読んで、彼女たちが日本をめざすことだってありえる。

おれはその日を待っている。

いつか日本のふきんに少女を満載した船がやってくる日を……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4146i/>

諸尾博士の島

2010年10月9日03時35分発行